

卒業論文

『椋鳩十が描いた山窩―自然を生きる山窩と椋の生涯を中心に―』

早稲田大学教育学部国語国文学科

1E16E072-6 高橋采那

目次

はじめに

第1章 椋が描く山窩

1 山窩小説とは何か

2 椋の山窩小説の特徴

2・1 山窩の生活

2・2 性への奔放さ

2・3 自然の中に潜む残虐性と死

2・4 人々の強さ

2・5 豊かな自然描写

3 作風の変化

第2章 現実のサンカと小説の中の山窩

1 現実のサンカと椋の作品内の山窩との比較

1・1 サンカと山窩の生活様式

1・2 サンカと山窩の葬儀

1・3 サンカと山窩の出産

1・4 サンカと山窩の移動

1・5 サンカと山窩の男女関係

1・6 サンカと山窩の犯罪

1・7 サンカと悪のイメージ

1・8 様々な山窩

2 山窩の創作

第3章 山窩小説と動物児童文学

1 棕の初期動物児童文学

1・1 『山の太郎熊』

1・2 『動物ども』より「月の輪熊」

2 山窩小説と動物児童文学の違い

第4章 棕の生涯と作品に込めた思い

1 山窩小説と棕の心情

2 作品形成の背景・意図

おわりに

参考・引用文献

はじめに

棕鳩十といえば、多くの人が「児童文学作家」としての姿を考えつくことだろう。実際、「大造じいさんと雁」や「片耳の大鹿」などの作品は長年教科書に採択されており、小学校の国語の授業で彼の作品を知る機会が非常に多い。その他にも、彼を「母と子の20分間読書運動」など図書館活動に力を入れた鹿児島県立図書館館長として知る人もいるだろう。しかし、彼が図書館館長に抜擢される前に長い間多くの児童向け文学作品を書いていたことは知られていても、児童文学を書く以前、また児童文学を書いていたとき、それと並行して「山窩小説」と呼ばれる作品たちを書いていたことを知る人は今日あまり多くないことだろう。山窩小説とはどのような作品なのだろうか。また後の児童文学や彼の活動に、山窩小説はどのような影響を与えたのだろうか。

そこで本論では、棕鳩十が最初に世に出した山窩小説『山窩調』（自費出版 昭和八年四月）や同年出版し発禁処分となった山窩小説短編集『鶯の唄』（春秋社 昭和八年十月）、昭和九年から十六年にかけて朝日新聞をはじめとした各誌に発表された山窩小説群、また昭和十六年から二十五年にかけて大衆文学雑誌『小説文庫』に発表された山窩小説群を中心に取り上げ、そこから彼の山窩小説作品の特徴や傾向を調べる。そうすることで、彼が作中の山窩の姿を通して何を表現しようとしていたのかについてや、作品を書いた意図、時代の変化による内容の変遷などについて明らかにする。また実際に日本で生活していた山窩の実態を研究した資料を参照しつつ彼の作品を見ていくことで、棕の山窩小説の記述の正確さ及び創造性により迫りたい。そして、彼の制作に影響を与えた彼の生い立ちといった制作背景について詳しく調べることで、彼の根底にある作品づくりへの思いや人間、動物、自然についての考え方を探りたいと考えている。

本論では、棕の山窩小説に特に重点を置いて論じる。現代ではあまり注目されていない棕の山窩小説を研究することで、棕の作品や棕鳩十という人物の新たな側面を発見することが出来るのではないかと思う。

第1章 棕が描く山窩

1 山窩小説とは何か

棕鳩十は今日児童文学作家として世間に知られているが、はじめから児童向けの文学作品を書いていたわけではない。児童向け動物文学を書き始めるまでは、法政大学時代の詩作を経て、「山窩小説」を書いていた。「山窩小説」とは、自然の中で国の政策や他人からの支配に縛られずのびのびと生きる漂泊民、「山窩」の生活を描いた作品である。山窩と呼ばれる人々の状態には謎が多く、大正後期には民俗学者の柳田國男によって研究がなされていたり、新聞記者の鷹野弥三郎が山窩に関する記事を大阪朝日新聞他各紙に連載したりしていた。そのように未知の存在であるが故に山窩の話題性は拔群であり、棕の山窩小説が出版された同時期には三角寛による山窩小説が人気を博していた。

棕は最初の山窩小説である『山窩調』を昭和八年四月に自費で、その後山窩小説短編集『鷺の唄』を昭和八年十月に春秋社から、それぞれ出版した。しかし、『鷺の唄』は、「性描写と無頼放浪の徒をあつかっている」ために一週間で発禁処分となってしまう。しかしこの発禁処分の後にも、棕は児童文学作家としての活動のために山窩小説から離れたりせず、戦後の昭和二十五年あたりまで児童文学と並行して山窩小説を書き、発表していたのである。

2 棕の山窩小説の特徴

「山窩小説」という作品について前節で述べたが、棕の山窩小説は一体どのようなものなのだろうか。宮下和男は、棕の書く山窩小説について以下のように解説している。⁽¹⁾

棕鳩十は、このような山窩小説によって、大自然を背景とした人間の自由な赤裸々な姿を描いている。現実の社会とはかけ離れているが、単刀直入にぐさりと切り込む、簡潔で大胆な描写は新鮮で、詩情あふれる“山窩の唄”として読者を興奮させる。

また、「棕は直截的であり、詩情豊かなロマンの世界を構築している」(2)とも述べている。要するに棕の作品は、自然に囲まれた環境で暮らす山窩の姿をありありと野性的に描き、文体は簡潔ながらも大胆な描写を含み、新鮮味に溢れ独特な詩的表現が多分にある作品であるということである。宮下が指摘するように、これらの特徴は彼が書いてきた作品に一貫するものである。彼の作品への理解をより深めるために、今一度その内容を具体的に調べ、彼の作品の特色や魅力を明確にしたい。

そこで本節では、棕による山窩小説『山窩調』、『鷺の唄』、また朝日新聞など各紙で掲載された作品、『小説文庫』で掲載された作品の内容を詳細に調べて、その特徴を山窩や動物の描写、山の風景を含めた自然描写などに重きを置いて、具体例を挙げつつ考察してみる。

2・1 山窩の生活

棕の山窩小説に出てくる山窩の大きな特徴として、近現代の日本の社会を生きてきた一般的な人々よりも解放的な生活を送っている点がある。それは何にも、何者にも縛られない制約からの自由であり、自らの本能のままに行動する奔放さでもある。これらの描写が顕著であったことが、棕の初期山窩小説が発行して間もなく発禁処分された理由の一端である。当時の政府から危険視される程に棕の山窩小説は、実際の閉塞した日本の社会とはかけ離れた、思うままに生きる人間たちの澆刺とした暮らしを豊かに表出していたのである。まずこの節で、山窩の自由な生活が表れている表現について見てみる。

棕の作品は険しい山岳地帯を舞台にしており、例外もあるが、基本山窩の仲間内でのやり取りや出来事が物語の主題となっている。この、外部の人間を排除し、浮世離れた自然の中での山窩だけの生活に着目することによって、一般人には窺い知ることの出来ないミステリアスな雰囲気を作り出すとともに、彼が作品を書いていた頃にはわずかに存在していたであろう山窩の、妙に現実味のある姿を読者に読み起こさせているのである。

では、実際に棕の作品の一文を見てみよう。以下は、「老山窩と娘」という作品の中の一

場面である。

さあ、いよいよ、彼等のほんとの生活が始まるのだ。

女達の後にしたがって、男達は楽しい旅に上るのだ。

冬眠していたあそこの沼地から、ここの沼地から、松脂の匂いのする山へ、新しい陽と野性の獣の匂いのする山へ、空の雲が流れ、空の雲が宿る山へ、鶯族の自由の唄のきこえる山へ、その皺の中へ彼等をかくしてくれる山へ、山へ山へ山へと、彼等は集って行くのだ。

（「老山窩と娘」 p160・161）

冬の間は小屋に籠っているが、春になるとすぐに山へと向かう山窩の清々しい気分を表現した文章である。この場面から、山窩の生活の様相は、季節問わず活動を行う人間よりも冬眠をして冬場は静かに過ごし、春に目覚めて活発に行動を開始する動物に近いように思われる。

また彼らの山を渡り歩くという行動における理念を、次の会話文から読み取ることが出来る。

―おこんよ、なぜいくんだか。

太い棒で火をかきたてながら、婆さんが云う。

―なんだか知らんがいきたくなっただよ。

―里にいい男でも出来たんじゃねえけ！

―うんにゃ里じゃあねえ。

―じゃあ、ほかに出来たのけえ。

―うんにゃ、俺あ、秩父の山に行きたくなっただよ！

―なぜけえ。

— なんだか知らんが行っていただよ！

(「山のトンビ」 p96)

これは「山のトンビ」という作品の中の、仲間の群れを離れる女性「おこん」とその仲間との会話である。彼らが山中を移動するのに大きな目的はなく、その時の気分や直感によつてその後の自らの行動を決めるのである。このことから彼らの行動理念は「自分の思いに素直に、自由であること」と考えられる。この場面の後には、「それに仲間を離れた心が、彼女をなんとなくのんんとさせる。重荷が取れて、心が風のように。足もまた風のように、おこんの若い足が、軽いバネのように土を蹴る。」(「山のトンビ」 p70)とあり、基本は群れて行動しているが、自らの思いのままに前の群れを離れ、また別の群れに合流して生活することも出来るようである。これには群れひとつひとつにグループとしての連帯があるというより、むしろ山で生活する山窩全体を仲間として考える、山窩の仲間意識がある。別のグループのリーダーの宣言が、何処に居ても仲間の伝言を通して直ぐに伝わることや、木などの自然物に付けた印によつて山窩の仲間がその周辺に最近寝泊りをしていることが分かるという表現が、驚の他作品の中にあることから、山窩全体に強固な仲間意識や、独自の伝達方法による繋がりがあることが分かる。そのため、誰かが群れを離れることがあつても咎めることはなく、群れに他の仲間が入ろうとすればすんなりと受け入れる。このようなおおらかな仲間意識があるからこそ個人が思うまま「自由に」山中を歩き回つて過ごすことが出来る。これが驚の描く山窩の生活なのである。

宮下和男も「大自然を背景として登場する山窩が、現実を超えた、野性的迫力をもつて生き生きと描かれており、人間というより野生動物に近い存在であること。そしてその筆致は大胆で、しかもすがすがしく、純粹さに満ちている」⁽³⁾と驚の小説を分析している。この分析の通り、驚は動物のように自然とともに生き、生命力溢れる山窩の生活を迫力を持って表現しているのである。また、宮下の指摘の後半にあるように、実際に山の風景を見て、風や鳥の鳴き声を聞き、木々や獣の匂いを嗅いでいるかのような、清々しくもリア

リテイのある筆致によって、山窩の生活を読者が追体験しているような感覚に陥る。これが、棕の文章から山窩のリアルな様子を感じさせる要因になっていると考えられる。

もう一つ山窩の生活で特徴的なところとしては、主に山猟や盗みで生計を立てている点である。一般人のように定住していないため、畑で作物を作るといような安定した生活を送ることが出来ず、基本的に毎日その日暮らしの生活をしている。その生活の様子として、棕の作品では「彼等は夕方になると、麓の里まで、鶏や仔犬や猫をかつぱらいに行かされる。」（「山の鮫」p37）というように盗みをする山窩が多く描かれている。他にも大鷲を鉄砲で撃って狩りをする者や、人里の牧場から上等な馬を盗んできて、商人と取引する「馬どろ」（「山の猛者」）、男を性的に誘惑して殺害し、財布を盗み取るうとする女（「紅い花」）などもおり、狩猟や盗みにしてもさまざまなやり方で行なっている。このように彼らは採取や猟によってその日の食物を得たり、盗みをして生活用品を確保したりしているのである。一般社会で暮らす人々にとって盗みは「犯罪」であるが、彼らにとって盗みは「犯罪」という認識ではなく、生きるための「手段」なのである。また、後にも述べるが自分で狩りや盗みが出来ない盲目などの病氣、障害持ちの女性で、山窩の仲間に身体を売って、日々の生活を保証してもらう者もある。このように、一般の人々には想像もつかない野性味溢れる山窩の生活を、棕は山窩小説の数々の中で描いていたのである。

2・2 性への奔放さ

次にこの節では棕の山窩小説での性的描写に注目して見てみる。棕の山窩小説では、全体を通して男女の性的関係が開け広げに描かれている。自らの本能のままに男女が関係を持つ性への奔放さを表現したために、当時の社会では「性描写と無頼放浪の徒をあつかっている」とされ、初期山窩小説は発禁処分となってしまうのである。

では、具体的にどのような表現がされているのか見てみよう。以下は「山のトンビ」という作品の一部分、山窩の女「おこん」を追いかけてきた男が、男を置いて一人群れを離れようとする「おこん」を捻じ伏せる場面である。

この力いっぱい、痛快な泣き声が、若者の心を不思議にかきむしる。怒りの陰にかくれていた欲望が、猛然と急流のようにはねかえる。

そこで、若者は女を捻じ伏せて、悠々と女を自由にして欲望を遂げる。

(「山のトンビ」p73)

「おこん」は男に振じ伏せられた痛みや悔しさから力一杯泣き喚く。その様子に欲望が湧いた男は、「おこん」を組み伏せて事を遂げる。このように、本能の赴くまま野性的に性行為に及ぶ描写が山窩小説では度々挿入されている。そしてその行為は、人間でありながら理性をもって欲望を抑えることなく、動物的な衝動によってその欲望を発散するかのように行われている。椋の山窩小説における男女関係には複雑な恋の駆け引きのようなものは無いといって等しい。山窩にとって性的行為は恋愛関係の延長線上にあるものではない。彼らは本能的、直情的に生きているために、性行為はあくまで好きなことをする、ストレスを発散するといったような生活の一部のようなものになっていると考えられる。

次に「山の鮫」という作品を見てみる。この作品で特徴的なのが、子ども達の性的関心である。

さて、飯が済んでも、私共は大人の天幕にはもどらない。焚火の廻りに横になって、女の話をするのである。

―あの熊公の若い嬢を盗むには、どうしたらいいだろう。

これについて、吾々は種々と相談し工夫する。これが、十二三歳の私共のすることなんだ。

(「山の鮫」p38-39)

この作品では主人公の「私」を含めた十二、三歳ほどの少年達が、ともに行動する群れ

の中の夫を持つ若い女を自分のものにしたいという欲望を有している。しかし、このように並外れた異性への性的興味を抱いていることから、思春期に突入したくらいの年齢であろう十二、三歳の少年達にしては、非常に大人びた印象を受ける。参考までに、内閣府が公開している平均初婚年齢⁴⁾を見ると、「山の鮫」が収録されている『山窩調』の出版された年である昭和八年は、男性の平均初婚年齢が二十七・六歳、女性が二十三・六歳である。山窩の少年達は、平均初婚年齢の一回り下であるにも関わらず、異性との性行為や婚姻関係を意識しているということになる。このことから、山窩の少年達は、一般社会で生活する人々と比べて、心理的な性的成熟が非常に早いものと考えられる。群れの異性への強い性的関心があるのは、前述した性的行為が生活の一部になっている周囲の環境もあるのだろう。さらに、既に婚姻関係を結んでいる女性に手を出そうと考えているところから、山窩の人々の内にある一般的な倫理に反した悪どさを伺うことが出来る。

物語をさらに読み進めるとその後、「熊の嬢」が群れから別れてしまい、それと入れ替わるように通称「雨蛙」という男と小娘がやって来る。「私」と幼馴染の「岩公」は、先ほどの「熊の嬢」同様にその娘を自分のものにするため協力しつつ争うが、その娘は「青蛙」の妻であることが判明する。しかし、この小娘は二人に「身をまかした」のである。このような記述があることから、夫が居ようともその身を幼い子ども達に委ねるような性のオープンな在り方が見受けられる。性的行為に強い関心があるのは男性だけではなく、女性も同様である。後に詳述するが、山窩の女性にとっても性的行為は大きな意味合いがあるのである。

さらにその後は通称「狼野郎」という跛の少年とその妹「蝶公」が物語に登場する。そして「蝶公」を「岩公」が自分の住処に連れ帰るなど強引に女性と関わりを持つとする描写が差し込まれている。

「山の鮫」では男性、特に幼い子どもの強い性的欲求が特徴的に描かれている。一般的に純粋無垢なイメージで描かれる傾向にある子どもが、棕の山窩小説においては生意気で悪どく、性に強い関心を持っている存在として描出されているのは注目すべき点であろう。

う。

次に、棕の山窩小説における女性と性的行為について見ていく。棕の作品内の性的描写における女性は、男性を魅惑する妖艶な雰囲気 را帯びている。例を一つ挙げてみる。「女豹」という作品では、片目の女「おこん」が主役になっている。「おこん」の一眼の美しさ、また花や落ち葉に体を投げ出して横になる艶やかな姿に魅了されて男性達は毎日「おこん」を追う。そして、「おこん」を見つけ出した男性は「おこん」を抱くことで、自らの欲望を遂げるのである。

おこんは、鹿のように、すっとした、強い脚で男を蹴り上げる。キチキチ揃った齒で肩先に噛みついてやる。が、男はまるで生きた大岩だ。びくともしない。そして恐ろしい力で彼女を征服する。ところが、おこんは、その蕃勇に征服されながらも、うっとり、となっていくのだ。

(「女豹」 p178・179)

「おこん」は魅惑的な振る舞いで山窩の男性達を誘惑し、それに惹かれた男性は「おこん」との性行為に及ぶ。一見、男性が無理矢理「おこん」を抱いて一方的に満足しているように思える。しかし、先の引用文の最後の一文に見られるように、「おこん」自身も男性を誘惑し、行為をすることによって快樂を得ているのである。「おこん」が行なっている振る舞いは恐らく意図的なもので、自分の快感のために男性を誘っているのである。

また、「膝の上」という作品でも、女性の誘惑的な姿が描写されている。作品の概要は以下の通りである。夫を持つ不精な女が、女に氣のある若い男と行為に及ぶ。その後彼女は見違えるように魅力的になり、夫の膝を枕にして横たわり大胆な様子を見せる。夫は彼女の変貌ぶりに目を見張り、公衆の前で二人で戯れ始める。若い男は夫婦が戯れているのを見て嫉妬心が湧き立つ。女は若い男との行為を思い出しつつ夫の膝の上で彼女一人の楽しみにふけるのである。この作品もまた女が男を誘い込み、夫と若い男とを取っかえ引っ

かえして自らの満足感を得ようとしている。女性が意図的に誘惑する抜け目のない様子を山窩小説では多く描いているのである。

また、女性がただ男性を誘惑するだけではなく、男性を魅了するために工夫や努力をする描写もある。

こうして女は、十分に叫び声を上げると、その辺の岩の間を歩き廻って、野菊や竜胆や、秋咲く香りの高い草を、腕いっぱい抱えて来た。そして、それらの草を岩の上に敷くと、体をのばして横になり、香り高い草花を、ごしごしと、まだ弾力の充分にある腕や股や胸に、擦り込み始めた。

それらの花の香りは、皮膚の中に強くしみ込んで、三十女の体臭と一緒にあって、胸をしめつけるような悩ましい香りを放った。

こうして女は、彼女のあの叫び声を聞きつけて、夕方までにはやって来るかもしれない、未知の男に対する戦闘準備をするのであった。

(「秋」 p138)

このように、男性への誘惑は女性にとっての「戦闘」に等しい。それ程、男性を誘惑することは山窩の女性にとって重要なことなのである。何故なら女性達が男性を誘惑し、思いのままにすることは、女性の「強さの誇示」に繋がるからである。

棕の作品では、女性が男性に一方的に支配される構図よりもむしろ、女性が男性を誘惑し相手をものにする構図がよく見られる。男性は腕力や威勢などの物理的な強さがステータスになる一方、女性のステータスは若さや顔、身体の美しさ、艶かしい雰囲気などの性的、美的な要素を備えていることである。先に紹介した「山の鮫」の中でも、主人公が最初に目をつけていた「熊公の嬢」の魅力を語る文に「―つまり、あの若さが忘れられなかったのだ。」(「山の鮫」p40)とあり、「若いこと」が山窩の女性のステータスの一つとなっていることは明らかである。また、「女豹」や「膝の上」、「秋」で見られたように、

見た目の美しさや妖艶な姿なども女性の「武器」になり得る。これらの要素を活かして快感を得ること、またより強い、頼りになる男を自らのものにすることが、棕作品の中で描かれる女性の生き方であると言える。性行為の主導権は主に男性にあるが、女性は性的な誘惑及び行為を利用して男性を意のままに出来る。山窩の女性はこの「女性であるが故の強さ」を性的行為の内に発揮して、山の中での彼女らの生活を生き生きと送っているのである。

最後に山窩特有の性への奔放さが表れている作品を見てみよう。以下は「春の日」という作品の一部である。

一体俺達山の民同士落ち合うなんて事は、一年に一度か二年に一度あるかないかである。そうして、こんな工合に落ち合った時は、俺達は俺達のあらゆる楽しみを尽すのだ。(中略)

そこで、他の群と落ち合うて二群が共にいる間、俺達の嬢は俺達の嬢でなくなり、彼女等の亭主は亭主でなくなってしまう。妻のない若い男や女は一層自由だ。

そこで俺達は、俺達の嬢を交換し亭主を交換した。

(「春の日」 p181)

二組の山窩の群れが落ち合って乱交騒ぎをする場面である。二組の群れの男女が混ざり合い、夫である男性は他の女性と、妻である女性は他の男性と行為に及ぶ。相手のいない若い男女は殊更自由に性的行為を楽しむことが出来るであろう。このように、既に相手がいる男女が自由に他の異性と性的行為を行なう点は、山窩の性生活特有のものであると言える。一般的な社会ではタブー視される行為であるが、棕の山窩小説の中では度々書かれているものである。現に、先に見た「山の鮫」でも男子が夫のいる女性を性行為の対象として考えている。山窩小説作品が書かれた時代では姦通罪によってこのような行為が裁かれていた中で、棕の山窩の世界では夫婦の掟などない自由な性のあり方が存在していたの

である。このような部分が、読者に山窩を自分達と同種の人間というよりも、人間とは異なった異質な存在のように感じさせている。この一般人とは違う「山窩」の開放的な性の様子が、数多の読者、特に閉塞的な生活を強いられてきた作品公開当時の人々を魅了していたのではないだろうか。

2・3 自然の中に潜む残虐性と死

山窩小説では、山中の壮大な自然に囲まれて生活する人々の姿が描かれている。自然と隣り合って生きる山窩達にとって、野生動物の凶暴さや圧倒的な強さ、また山の中で生きるもの全てを取り巻く自然環境の脅威、そしてそれによる死は常に身近に感じるものである。この節では、棕の山窩小説の中での脅威的な自然や動物の様子、山の中で生活する山窩達の死の考え方について見ていく。

まず、自然の脅威の表現について見てみよう。自然に囲まれた生活を営む中で避けられないのが自然災害である。棕は山窩小説の中でこの自然災害の恐ろしさを巧みに表現している。その例としては、「夕立」での激しい勢いを持つ風雨や、題名通り唸りを上げて人々が住むところへ襲いかかって来る「鉄砲みず」などが挙げられる。以下は、この二作品での自然災害の描写である。

真っ黒い雲だ。

暗夜の海の波頭にのって、海馬が首をそろえて、駆け出すようだ。一列の黒い塊が黒雲の海から飛び出すと、またそのすぐ後から、それを飛び越えて、黒い塊の一列の首が延びた。

空中が、黒い海になってしまうと、谷も峰も岩もゴーと唸った。

風だ。(中略)

大粒の黒い雨が、そうだ黒い雨が、烈しい風によって、山中をたたきつけた、雨と同時に龍の昇天する時の如き、冷たい灰色の霧が、おそろしい勢いで、谷底から渦

を巻いて、巻き上がって来て、山中をぐるぐると、ひん巻いてしまった。

（「夕立」p94・95）

黒い奴は、俺の直ぐ下まで流れて来た。木をむりむり折り、岩にぶちあたり、出張った崖を掻き取り、どうどう鳴って、唸り立てて、雷よりも大きく谷中に響いて、或は谷の灌木や雑草をなめて、この侵入者は水音の笑い声を立てた。

（「鉄砲みず」p117）

まるで生きた動物のような自然の表現によって、読者に迫りくる自然の恐さを追体験させている。棕は擬人法を巧みに用いて、迫力のある自然災害を描いているのである。そして、この自然災害に巻き込まれた人々は、呆気なく死んでしまう。「夕立」では、この風雨に襲われた親子の子どもが、風にさらわれ谷底に落ちてしまい、「鉄砲みず」では、鉄砲水に巻き込まれた主人公の父親が大怪我を負った末に死をほめかすような結末に終わっている。強大な自然を前にした時、人間はなす術もなく、簡単に命を落してしまうということ、棕は堂々と書ききっているのである。

また、野生動物の脅威も棕は描いている。

タケの山犬は、全く急遽に、くるつ、と再び向きを変えて、全く一目散に、首をシヤンと立てて、タケの方にヒュッヒュッヒュッと走り寄った。二三歩手前まで来ると、咽喉を高く上げて、

ーフウーヲヲヲオ。

と山犬は吠えた。

タケは「それ見あがれ、ざまあどうだ」と云うような顔で、吾々の方を向いて、にっこりした。しかし、その隙に、山犬は、さっ、とタケに飛びついた。タケは声も上げず、ひっくり返った。

驚いた。

タケの首は胴から離れて、ことりこりと岩の間を谷底の方に転がって行った。

（「山犬」 p193・194）

これは「山犬」という作品の結末の部分である。タケという少年が夏の間に手懐けていた山犬を、冬になって呼び寄せた結果、このような悲劇が起こってしまった。山犬は夏には人懐っこい様子を見せていたが、冬は一変して飢えた山犬の凶暴さを露わにしている。他にも動物が登場する作品はいくつかあるが、山窩が動物に挑んだ結果死に至るものや、野生動物に襲撃されて死を迎えることを示唆するものが殆どである。このように野生動物の残虐性を描くことで、危険に満ちた山窩の生活のリアリティを引き出していると考えられる。棕は後に動物が登場する児童向け文学を数多く手がけるが、その中で見る慈愛と勇氣に満ちた立派な動物の姿とは対照的な、残忍で人間の脅威になる動物の姿を山窩小説の中で描いている。

次に山窩の死とその考え方について見ていく。山で生活する山窩は山で生まれ、山で死ぬ。山窩達の中には、彼らが死にゆく時に暗黙の了解とでも言うようなある種のしきたりがあり、それを遵守している。それは、「死にかけている山窩は必要最低限の食料だけ残して、落ち葉などでその人の体を覆い、そのまま置いていく」ことである。棕の作品の中では、このしきたりを守って死にかけて人や体が動かなくなった人を置いて去る描写が数多く見られる。「山の人びと」という作品では、「熊助爺さんの右手と右脚が利かなくなって、爺さんの大事にしていた犬の太郎と一緒に、岩の洞に残して置いた」（「山の人びと」p105）というように、やはり体の動かなくなった老人を安全なところに置き、そのまま去っている。この行為については「こうしたことは俺たちの習慣であった」（「山の人びと」p105）とあり、一見残酷に思えるこの行いも山窩にとっては当然のことであるとしている。瀕死の状態にある人を無理に動かしたり、死ぬまで側についていることは決してしない。淡泊な接し方でありながらも、自然の中に生まれた者を死を迎える際に自然に還すこ

とをしきたりとして行なっているところに、山窩という民族のある種の優しさを感じるこ
とが出来る。

また、既に死んでしまった者への対応が書かれた作品もある。

男は女も子供も死んでいることを知ると、静かに坐って一人で粥をすすった。

食事がすむと、男は山を這い歩いて落ち葉をかき集めて来て、女の上にうず高く積
み上げた。金の落ち葉の山を女の上に築くと、男は涙と水っ洩と一緒になった奴を、
チーンと高い音立てて手ばなでかんだ。

そして、黙りこくって、タッタッタッタツ、昨夜別れた群の方に走って行った。

(「霜の花」p82)

「霜の花」という作品では、冬の雪の中で女性が出産した後、彼女も子どもも死んでしま
う。出産という生命に関わる行動と、冬の山の厳しい自然が残酷な結末をもたらしたので
ある。この作品では、死んでしまった妻と子を夫が見つけ、落ち葉を彼女らの上に積み上
げて、そのままその場を立ち去っている。ここでもやはり、死者を自然に還しているよう
な様子が見て取れる。それと同時に、山窩はいつまでも過去を振り返らず、前を向いて自
分の道を進んでいく者達であることも分かる。生きている者は、墓標などを作って死者を
悼み続けることもなく、死者を自然に還した後は彼ら自身の人生をまた歩んでいくのであ
る。

棕の作品は死にかけている人を置き去りにしていく山窩目線の物語だけではなく、死に
瀕していく山窩目線の物語もちろんある。動かなくなった体を落ち葉に埋めながら、迫
り来る狼に慄きつつ死の直前まで食事をとる老婆(「朽木」)や、生きる意志を失っていた
にも関わらず黒い獣(狼)に襲われた際は「死ぬもんか」と死に抗いながら、絶えず流れる
血や遠のく意識から「今、死んで行く所なんだな」と冷静に死を悟る男(「無精な男」)、
体の自由が効かなくなって子ども達に自分を殺すよう命じる老婆(「呪婆」)などがそれで

ある。死にゆく人々の物語に共通しているのは、皆「死への恐怖を感じつつも冷静に死を受け入れている」点である。死を恐れることは、人間なら誰しも抱く感情である。しかし、それを抱えながらも平然と死を迎えることが出来るのは、彼らが死を常に身近なところにある当たり前のものと捉えているためであろう。先にも挙げた自然災害や野生動物の脅威に常に晒されている彼らだからこそ、いつ自分が死ぬか分からない状況下でありつつも、人は生まれたら必ず死ぬということを弁えており、冷静に死を受け入れることが出来るのである。

棕の山窩小説は残酷な死を身近なものとしているために後味の悪い終わり方になるものが多い。しかしその恐ろしさに圧倒されながらも、山窩の悟ったような死に対する考え方は目を見張るものがある。

2・4 人々の強さ

棕の山窩小説で際立って見られるのが、山窩という人々の「強さ」である。一般人にはない、過激で野生的な力強さが山窩にはあり、それが山窩小説の見所の一つにもなっている。この節では、山窩全体に感じられる強さと、山窩女性に際立って見られる強さの二つに注目し、それらについて考える。

まずは、山窩と呼ばれる人々全体に通じる強さについて見ていく。山窩は基本集団で暮らしているが、必ずしも友好的な協力関係を保っているとは言えない。棕の作品の中でも、女を巡る男の争いや逆に女による男の取り合い、群れのリーダー争い、弱者へのいじめ、憎しみや嫉妬の感情を抱くなど、緊張状態にあることが多い。そのような状態の中で生きていくために、時には仲間を蹴落とし、牽制するなど自らの立ち位置や大切なものを守ったり、より高い地位や欲するものを得たりするための「強さ」が必要になるのである。そのような「強さ」が表れている例を見てみよう。「猛禽類」という作品は、老婆が持っている孔雀石でできた煙管欲しさに、若い男がそれを盗み出そうとする話である。老婆を崖から突き落とした若者が群の仲間に撲殺された際、若者は盗んだ煙管を噛みしめて死んだ。

以下はその後の場面である。

婆さんは、死んだ男の齒の間に銜えられている孔雀石の煙管を、親指の腹で、二三回撫でさすりながら、じっと考えていた。が、ふと立ち上ると、若者の顔を横向けにした。そして、頭大の石をもって来ると、骨ばかりの腕で、高く石を差し上げ、若者の頭目がけて投げおろした。

不気味な音と共に、若者の顔は菊の花のように潰れた。

(「猛禽類」p91・92)

老婆は大事にしている煙管を取り戻すために若者の顔に大石を投げ下ろして彼の口から取り外し、それを再び自らのものにしたのである。あまりにも惨いやり方のように思えるが、彼女にとっては、あくまでも自分の大事なものを取り返すために必要な行動をとっただけである。岩を顔に落とす前に何か「じっと考えていた」のは、残酷なやり方で煙管を得ることによる若者へのためらいの気持ちによるものではなく、「どうやって煙管を取り戻そうか」と考えていたのではないかと思われる。彼らは己が欲するものを獲得し守るためには手段を選ばないのである。

もう一つ、例として「火」という作品の結末の部分を挙げる。

俺は、山の民特有の立足で、音もなく滑るように、唄に酔っている男の背後に近づいた。

俺は首を左に傾けて、じっと呼吸をはかっていたが、山猫のように歌う男に飛びついた。

唄声は突然断ち切られて、短い叫び声と共に、親方は黒い弧を描きながら、深い谷の底の方に、石のように落ちて行った。

その黒い物体は、岩の角にぶちあたると、ゆっくり二つに引き裂けて、あたりの岩

に突然、赤い血がこぼれ散った。

(「火」 p176)

これは、群れの中の冴えない男が女に魅了され、女欲しさに彼女を愛でるリーダー格の男を谷底に落とす場面である。女に誘惑されても、面と向かってリーダー格の男と対峙すら出来なかった男が、最後には相手の命を奪うまでに至る。これらの描写から、自らの欲望のためならいくら生活を共にしていた仲間とはいえ他人の命も惜しまない、山窩の獰猛で残忍な「強さ」を感じ取ることが出来る。

また、群れの中での「強さ」のぶつかり合いが最も起こるのが、男達の女の奪い合いによる争いである。棕の山窩小説における女の奪い合いは、大人の山窩の間にも子どもの山窩の間にも起こるものとして書かれている。子ども達の間での女の奪い合いは、時に大人の間でのそれよりも残酷なものになり得る。この子ども達による争いを主に描いているのが、「敵」という作品である。内容としては、女を自分のものにするために、群れのリーダーの座を争うという話である。群れの子どもは、子ども達の中の唯一の女性である「おこん」をリーダーのものにするという約束をしている。これを破ったものは、厳しい刑罰が処せられる。以下は、その仲間の約束を破って「おこん」に近づこうとした「俺」に処罰をするシーンである。

―さあ、この岩の上に手を置きねえな。

俺は、手がぶるぶる慄えるのを、歯をくいしばって、ぐっと我慢して差し出して岩の上に置いた。俺の反抗心が一寸でも弱ったら、俺は泣き声を立てる所であった。飛び上がる程の痛さを感じた。

目を開いてみると、俺の小指は存在を失って、岩の上に、赤い薔薇の花のようにつぶれてころがっていた。そして、真紅の真珠のように、ピュッピュッと吹き出た。

俺は、つぶれた、ひと掴み程の肉片を掴み上げると、白豚の顔に投げつけた。

(「敵」 p155c-156)

子ども内の関係性でありながら、当時は小指が切断されるところや血が吹き出すところで伏字が付けられるほどの残虐な処罰を行なっている。群れの中で定められた厳しい規律を守る忠実さがある一方で、恐怖心や痛みを押さえ付けるほどの反抗心に燃えているのがこの場面から見取れる。この場面の前には子ども達がリーダーを見上げながら、「その目は一見服従を意味しているようだったが、目玉の奥の脳味噌の中では、反抗的な考えがうずうずしていた」(「敵」 p152)という描写もあり、彼らは皆それぞれ自分の野望である「女を得ること」を達成するために、今振りかざされているリーダーの権力に決して屈しない心の「強さ」を持っている。

また、群れの主に服従する子ども達もただ付き従い、一方的にやられっぱなしではない。その時に群れのリーダー的存在であった少年「黒猫」を叩きのめすために「俺」と「白眼の助」が同盟を組んである日「黒猫」に襲いかかる。

―明日の朝、あの野郎は泣きっ面かくぞ。

黒猫は、こう云いながら、天の方を向いて大きな欠伸をした。

俺はすかさず、穴熊を取る時の縄を、ひゅう、と投げつけた。輪になった縄の先は、飛びつくように黒猫の首に引っかった。

黒猫は、しめられた鶏みたいに、気をつけの姿勢で両脚をぴーんとのばした。奴は、動けば、益々強くしめつけられることを知っているので、そのまま、じっとして、機を見て縄から脱れようとしていた。(中略)

―助、何していやがるんでえ、奴の右腕をつぶしてやれよ。

助は、俺の方を向いて、にやり、とした。それから、黒猫の右腕をたたき折った。が、奴は、目を閉じたままで、唸り声ひとつ出さなかった。

(「敵」 p156c-156)

子ども達の中の暴君として恐れられていた「黒猫」は、二人の計略にまんまと引っかって腕を折られてしまう。この時もまた、惨たらしいやり方で「黒猫」はやられているが、彼は声ひとつあげようとはしない。恐らく山窩の仲間達の中で、痛みに泣き声をあげたり、許しを乞うたりすることは弱者のすることだと考えられていたのだろう。仲間に不意打ちをされても、大きな怪我を負わされても必死で耐えるところに、子どもとは思えない高いプライドを感じる。

そしてその後は「俺」と同盟を組んでいたはずの「白眼の助」が、「俺」を出し抜き群れのリーダーとなる。「俺」も彼と同盟を組んだ際、心の底から彼を信用することなく隙を見て「おこん」を手に入れようとしていたが、「白眼の助」も同じことを考えていたのだろう。「白眼の助」は今まで「黒猫」が行なっていたように「おこん」を自分のものにし、仲間に手出しをさせないように約束させる。「俺」はもちろん、リーダーの座から引きずり下ろされた「黒猫」もまた下っ端となって、表面的にはリーダーに服従しながらも腹の中には彼を憎悪し「おこん」を手に入れようと考えている。このように、子ども達の間とはいえ、常に相手を出し抜き自らの野望を遂げようとする強かさをこの作品から見る事が出来る。緊迫した状況下で、同じ目標を持つ相手を知恵と腕力を使って蹴落とし合い成り上がることで、彼らの欲しいものを得ようとする「強さ」が形づくられていくのだろう。

次に、山窩女性に見られる強さについて見ていく。まず、例として「山の私窠子」という作品を挙げる。これは盲目で、体売って生計を立てている女山窩「オシュン」とオシュンの昔からの馴染みで思い人である男「イワ」、山の仲間内に有名な乱暴者「虎」の三人を中心とした物語である。「オシュン」は毎年初夏頃に売春を始める。誰にでも体を許すが、特に昔馴染みの「イワ」を思っていた。ある日やって来た「虎」が「オシュン」を気に入ってから、彼は他の男が「オシュン」に手出しさせないようにし、しばらく共に生活した。その時「イワ」が「虎」から「オシュン」を取り戻そうとするが、「虎」の威勢に圧倒され、命惜しさに逃げ出した。その後「オシュン」は「虎」を誘惑し、谷底に突き落とす。その

様を見て「イワ」は彼女が自分を思ってくれていたのだと考える。以下は、「イワ」が「オシュン」の行動に感動し、彼女のもとに駆け寄ってくる場面である。

「オシュン！」

息せき切って駆けしてきたイワはオシュンの肩をぐっと掴んだ。彼は、はげしい愛に体をふるわせていた。

「お前はなんて、烈しい女なんだ。俺あ、お前のためになら命なんぞ……」

「一体お前さんは誰だい。私は暫く休んだから稼がにやならないのさ。邪魔しないでおくれ。」

オシュンはこう云うと彼の手を払いのけて、茫然としているイワを後にして歩いて行った。

（「山の私窠子」 p123）

五年間体を売って生活している中でずっと思いを寄せていた「イワ」の情けない姿を見ると、途端に「オシュン」は彼への興味を失い、あっさりと態度を変えてまた体売る生活に戻る。このように、山窩の女性は弱い男性を嫌う。これは強い男を捕まえて自分の相手とすることが、山窩女性の生活や立場の向上に繋がるためであろう。しかし、「イワ」を思っていた時に独占欲から「オシュン」に暴力を振るっていた「虎」をも彼女は巧妙に殺してしまう。「虎」が若いうちにしか出来ない彼女の「商売」の邪魔になると考えたためか、「虎」への興味も失ったためか、殺した理由は分かりかねるが、彼を殺すと即座に他の山の男へ鞍替える姿勢を見せている。山窩の女性は、自らの利益や欲望を第一に考え行動しているのである。このような山窩の女性の生きる上でのたくましさ、強かさがこの作品では非常によく表現されている。

また、山窩の女性が男性を奪い合うこともある。「秋」では、十九歳の若い女と三十近い女が一人の男を巡って争っている。二人は暇さえあれば互いを罵倒し、取っ組み合い、引

っ掻き合いの喧嘩をするが、二人の中心にいる男は十年連れ添って来た三十の女ではなくいつも若い女の肩を持つ。それが癪に触り三人が生活する天幕を飛び出した三十女は、ひと眠りして若い女への対抗心を燃やすと、再び男と若い女がいる幕に戻っていく。以下は幕に戻って来た三十女と若い女とのやりとりである。少し長いがそのまま引用する。

―野郎、猫やろう、うそもどつて来やあがつて。

若い女は、うんと肩を上げて、そっぽを向いたままで吐き出すように云った。

―あんな男あ、手前にくれてやらあな、やきもきするねえ。

―へっ、あきれたこと云うねえ。

若い女は火勢の弱くなった火を吹きながら云った。三十女はその隙を逃さなかった。ぱっと飛びつくと、円っこく肥った若い女の肩の真中を、うんと蹴っ飛ばした。若い女は、あつ、と叫んで、四つん這いになって、火の中に手を突っ込んでしまった。そして、熱さと口惜しさに、泣き声を上げながら、しかし、復讐することだけは忘れずに、自分の手に焼けついた燠をひと掴みつかむと、相手の女目がけて投げつけた。

燠は花火のように飛び散って、女の髪の中に飛び込み、着物の中に滑り込んで、きな臭いにおいを立てた。

二人の女共は猫のように鳴き立てて、着物を引き裂き、噛みつき合い、お互いの唇は相手の女の血で汚れ、二匹の山猫のように、いがみ合った。

(「秋」 p139)

まるで獣のような激しい争いを彼女らは繰り広げる。相手を蹴り飛ばし、火の中に握った燠を掴み投げ、引っ掻き噛みつき合うその隙のない戦いぶり、一般人の男性も顔負けするほどである。「棕の描く女は不屈で、野性的で、弱音をあげることがない。しかも妖艶である。殴られても、噛みつかれても、火傷を負わされてもひるまない。まさに野生その

ものである。」⁽⁵⁾という宮下の言葉通り、棕の山窩小説内の女性は大抵が力強く、常に強気で男性を圧倒するほどの威勢がありながら艶やかさも兼ね備える。このように作中で女性は生命力に富んだ非常に魅力的な存在として描かれている。そして彼女らも自らの欲するものを得るためには、妖艶さを捨てて、男性を魅了するために使っていた体を争いのために使うのである。

最終的には男が若い女を優遇し、三十女は幕から出て行くことになるが、二人への復讐として彼女は大岩を二人の元へ落とす。

―エエ、コンチキショウ。

女は、大岩を、ぐらぐらと動かすと、二人目がけて、蹴込んでやった。

岩は、灌木を、ばりばりと折って、唸って、猪みたいに、真っ直ぐに二人の方へ落ちて行った。そして恐ろしい勢いで二人の頭を跳り越え、幕を押し潰した。(中略)そうしてるうちに、ヤケクソの笑いが込み上げて来て、爆発した笑いを、下の野郎共に、がらがらと落としてやった。

(「秋」 p141)

大岩を崖下の二人に向かって蹴込む屈強さと、若い女に負けて幕から追い出された悔しさから復讐を果たす反発心、敵愾心の強さがここから分かる。その後復讐を果たした三十女は、次第に若い女に負けた自分に悲しみを感じ、泣きながら山を歩く。しかし、一時間ほどでその悲しみも収まり軽やかな気持ちになる。女性としての魅力が失われていつていることを危惧して悲しく感じるが、それを引きずり過ぎずに即座に気分を整えて前向きに進んでいくところに山窩女性のメンタル面の強さも見る事が出来る。

「棕の山窩小説の中の主人公は大抵が女性である。野性美に満ちた荒々しい山窩の女を描くうえで、棕は抜群の表現力を持っている。」⁽⁶⁾とあるように、棕の小説では女性が物語の中心になることが多い。彼の作中の女性にほとんど共通して言えることは、常に怯え

ていたり他人に追い縋ったりするような弱々しい女性は存在しないということである。彼女らは自分の生活のために他人を利用したり、相手を圧倒するような甚だしい強さを持っていると、精神的、肉体的強さが際立っているのである。

以上、山窩全体、そして山窩の女性が持つ強さについて見てきた。作品から感じ取れる彼らの強さは、自然の中で生活する上で身についた野性的な腕力や体力、精神力だけでなく、集団生活で自らの立場や生活を確保しつつ、欲望を叶えるために自身の力を発揮するという生き方によって得たものであると考えられる。

2・5 豊かな自然描写

これまでの節では棕の作品の内容について見てきたが、この節では文章表現の特徴について考える。棕の小説の大きな特徴であり、山の生活の様子にリアリティを感じさせる要因となっているのが豊かで巧みな自然描写である。ここでは、色彩の表現と、擬人法や比喩による表現の二つを例を挙げて見てみる。

まず、自然の色彩表現についていくつか例を挙げる。

空を仰ぐと、木の葉の間からはみずみずしい金色の星が一つ。木の下は闇が隙間もなく這い廻っているが、空にはまだ昼の若さが残っている。

(「山のトンビ」p70)

山は、山もまた金色に輝いて、新しい娘のように洗われた空気の中で光った。

(「夕立」p99)

次の日は雨がからりと晴れた。

空は木の葉よりも青かった。濡れた山は金色に輝いて、御伽話の宮殿のようにぴかぴかと、無闇に光立ってた。太陽は、よく乾いた新しい着物のように気持よく、吾々

の体に巻きついた。

小鳥達は、女のように、びちくりびちくり光る葉の上や、濡れた黄金の枝の上で騒いでいた。

(「打たれた鷺」 p103)

谷は燃え立った秋の樹立につつまれ金の葉の上に金の太陽が輝いていた。それは絢爛なゴッホの絵であった。

(「山の人びと」 p111)

読者の目の前にカラフルな情景がありありと浮かんでくるような美しい自然描写である。このように、自然の様相を表す時、多様な色彩表現を用いて描き出しているのである。また、彼の作品で多く出てくる色が「金色」である。太陽に照らされた山や木々、葉などを金色と表現している。これは、棕が彼の目で捉えた故郷の長野県喬木村の自然の風景を参考にして表したのではないだろうか。さらに、作品の中の「金色」は平和的な印象をもたらしていることから、幸福さ、豊かさの象徴としてこの色を多用したと考えられる。

次に、擬人法や比喻を用いて自然を表現している文章をいくつか例示する。

山は静かであったが、しかし、秋の陽をいっばいに浴びた山は、大層楽しい心のよ
うに、底の底から気持ちよくふくらんで、ばんばんしていた。

(「黄金の秋」 p62)

右手の方には、ずっと山脈が見えた。峰と云う峰にいっばい陽をうけて、薄群青色
のなめらかな背中だ。それらの幾百と重なり合った背中には、光線のホコリみたい
なものがついて、ぼやけて見えた。

(「夕立」 p93)

白い霧が、頭髮にからみつき、腕に巻きつき、睫に、針の先よりも細い露となつてたまつた。

（「膝の上」 p129）

朝が早かったので、霧は容易に晴れる気配もなかった。落葉の上から湧き上つて来るかと思うと、木の間を縫って流れた。なめらかに濡れた幹は、霧が流れるにつれて、或はかくれたり、或は現れたり、茶色や褐色の縞を作った。

（「膝の上」 p130）

山や霧がまるで生きているかのような豊満さや滑らかな動きを持って表されている。前節で挙げた自然災害の描写も同様にその激しさ、恐ろしさを擬人法を用いて描いている。棕は山や太陽、風などの山窩を取り囲む自然を生き物のように捉えて表現している。この擬人法や比喻を使った自然描写によって、読者に山の中の空気や匂い、動きや光などを現実味を持って感じさせることが出来るのである。

このような巧みな自然表現は、彼が山窩小説を書く前に執筆していた詩の影響が色濃く出ていると考えられる。彼が学生時代に書いた詩には、「白い瓶の上に青い空が光り朝日が薔薇色にうつっているだろう。（『夕の花園』より「海」 p78）^{（7）}、「秋が臨終の吐息をつく。冬の足音がかすかに聞え始めたのだ。が然しまだ秋は生きている。」（『夕の花園』より「晩秋」 p84）^{（8）}というような表現がある。彼は詩作を通して、自然の美しさ、リアルさを簡潔な文章で表す技術を習得したのである。この経験が、先に見た山窩小説での色彩表現や擬人法、比喻を使った生命力に富んだ自然描写に活きていると言える。

3 作風の変化

棕は『山窩調』、『鷺の唄』を刊行した昭和八年から昭和二十五年まで山窩小説を書

き続けている。最初の児童向け動物小説『山の太郎熊』を書いたのが昭和十三年であり、児童向け小説と並行して山窩小説の執筆を行っていたことになる。山窩小説はこの昭和十三年までの作品(昭和八年〜十二年)とそれ以降の作品(昭和十五年〜二十五年)とで雰囲気が大きく変わっている点がある。それは、昭和十五年以降の作品が山窩と里人(一般人)との触れ合いが主になっていることである。それ以前の作品は、鷲や狼、山犬などといった動物や、激しい夕立、鉄砲水などの自然の脅威に対する山窩の姿や、山窩同士の異性を巡る熾烈な争いをしつつ、気の向くまま毎日を送る自由な山窩の生活ぶりを描いたものが多かった。これらの作品からは、山窩の生活は閉鎖的で、世俗の人々とは隔絶したもののような印象を受ける。

一方、昭和十五年以降の作品は一般人の男性と山窩の女性の交流を描いたものが大半を占める。それまでの作品の傾向とは大きく異なり、山窩と一般人との距離がより近いものになっている。このような作風の変化が現れたのは、昭和十六年に雑誌『山と溪谷』に掲載された「沼地の山窩」という作品からである。この作品は一般人の家族が沼地へワラビ狩りに出掛けた際、持ってきた弁当を沼地に幕を張っていた山窩の女に食べられてしまうという、一般人と山窩との出会いを描いている。主人公である「私」はその出来事以来山窩に興味を持ち、沼地を度々訪れ偶然以前会った女を見つけるが、突然現れた山窩の大男の迫力ある声に驚き逃げ帰ってしまう。その後再び訪れたときにはもう山窩達は居なくなっており、代わりに見つけたのは女が身につけていたらしい赤い木綿のきれ、そして山窩達の生活の跡であろう糞のみだった、という話である。神出鬼没で不可思議な山窩の姿を山窩のコミュニティに属さない一般人の目線で書いている。そうすることで、一層山窩の奇抜さが際立つと同時に、山窩の女性の浮世離れた魅力が浮き彫りになるのである。

このような山窩の女性と一般人男性との交流を書いた例をいくつか挙げてみる。まず「火」という作品を見てみよう。

山窩の蔵品を買い取る商売をしていた吉蔵は、客の男が連れてきた女に惹かれて手を出

してしまう。その後女は吉蔵に好意を寄せるようになり、付きまとい始める。以下は女が吉蔵の家に忍び寄る場面である。

吉蔵、夜中に、何か、こう寝ぐるしくなって目がさめた。

「おや、夢じゃねえかな。」

と思って、目をこすった。

彼のねどこの中に、女が寝ているのだ。

「ほほほ、何を驚いているのさ。」

その女は笑いながら、吉蔵の方に体をくねらせた。

山窩の娘だ。(中略)

吉蔵、恐怖のあまり、声も出なければ、体を動かすことも出来なかった。

彼の首には、太い青大将が、ぐるんと、まきついていたのである。

「わたしや、好きになった以上は、どんなことをしたって、お前さんを手ばなすものか。」

娘は、吉蔵の頬に、自分の頬をすりよせた。

吉蔵は、娘のするままに、まかせるより仕方なかった。

次の日から、彼は、戸じまりを嚴重にした。が、やつぱり、駄目だ。

山窩にとっては、雨戸なんぞ、紙障子に等しいものだ。

(「火」p188-189)

この場面から、山窩の女性の尋常ではない強い愛情、執着心を窺い見ることが出来る。激しい感情とその狂气的な表現方法は一般人離れしたものを感ずる。また女は山窩特有の技術によるものか、圧倒的な腕力によるものかは定かではないが、戸締りを嚴重にしても侵入してくるような一般人には防ぎようのない力強さを持っている。彼女の恐ろしい強さを表すのは僅か二行ほどの文であるが、一般人と山窩との間の能力差や彼らの生活する環

境などの違いを明らかにしている。

次に、「山の娘」という作品を見てみる。この作品の概要は以下の通りである。洋画家である草野春夫が赤石山を描くために伊那の谷に行った際、入った飯屋で近頃周辺で食べ物をかっぱらっていた山窩の姉弟が暴力を振るわれていた。草野は彼らを庇うようにご飯を奢ると、姉弟は食べてすぐに逃げ帰ってしまう。その後草野が小渋川の辺りで絵を描いていた時、以前助けた少女と再会をする。誘惑するような仕草をし、逃げる少女を追いかけた草野は、顔に傷のある山窩の大男に威嚇され、その娘を連れ帰られてしまう。だが、それから草野と娘は仲が親密になり、草野が泊まっている宿に度々娘が押し掛けてくることもあった。

そしてある日草野が娘の絵を描いていると、前の大男が現れ、娘を諦めろ、さもなければ娘を崖下に落とすと脅す。娘は私はお前以外の誰のものでもないから、私もろとも男を落とせと懇願するが、草野は娘を大事に思う一心で彼女を諦めて助けようとするのである。以下は草野が娘の命のために選択をする場面である。少し長いがそのまま引用する。

男は、腕に力を入れて、娘を投げ込む姿勢を取った。

「まで！」草野は、押しつぶされたような声を出した。

「じゃ、このあまっこを、あきらめたというのだな。」

「……………」

「返事をしろ、三つかぞえるまでだぞ。一つ…………二つ…………さあ、どうだ。あきらめたのか。」

草野は、黙ってうなずいてみせた。

「ハハ ア、そうか。」

と、云って、一寸、男が腕の力をゆるめた時、娘は、体中に力を入れて、ぶるんと体を一つゆさぶった。

あつ、と云うまに、男の手をはなれて、娘の体は、崖の下に落ちて行った。男も、

不意をうたれて、体の平均をとるひまもなく、そのまま、足をふみはずして、娘の後を追った。(中略)

「うーん、うーん」という、うめき声をきいて、草野は我にかえった。

みると、血だらけになった男が、これも虫の息の山の娘を負って、崖をはいあがって来たのだ。「おお」と、思わず叫び声をあげて、草野はかけ寄った。山の娘は、閉じていた目を細くあけた。そして、草野をみると苦しい息のしたから、異常な努力をはらって、草野の顔をめがけて、「ペッ」とつばをはきかけた。

(「山の娘」p200-202)

結局二人とも崖下に落ちてしまい、崖下から二人が生きてよじ登ってくる様子を見ていた草野は、娘に顔に唾を吐きかけられてしまう。そしてそのまま山窩の二人は灌木林の方へ姿を消してしまった。この場面以前、娘は草野に激しく惚れ込んでいたが、それまでの強い愛情から一変、冷淡な態度をとって去ってしまうのである。これは、前の節で挙げた「山の私窠子」と同様、山窩の女性には弱い男性には興味がないことを示すものであろう。「山の娘」の少女は、彼女の命惜しさに山窩の男に屈した草野の優しさに感情が揺れることなく、むしろ軟弱な態度をとったことに失望したようにも見える。このことから娘を含め山窩の女性は、心の優しさよりも力や精神の強さに重きを置いていることが分かる。それは山窩の人々にとって厳しい自然の中で生き残るためには、優しいことよりも強くあることが必要不可欠だからではないかと考えられる。また、後期山窩小説ではしばしば山窩男の恐ろしいイメージと、それに圧倒され怯える一般人の姿が対比されている。前述した「沼地の山窩」でも、強そうな山窩の大男とそれに慄き逃げ出す一般人の「私」が描かれている。山窩は一般人よりも気迫があり、屈強であることをこれらの作品では強調しているのである。

最後に「淀の下之恋」という作品をしてみる。あらすじとしては、イワナ釣りの源吉が木曾山脈の黒川の淵の釣場に向かうとき、美しい若い女に出会う。彼は彼女を見て心臓

が高鳴るほどの興奮を覚える。彼女に会うために同じ場所で待って、三日目によくその女が再び現れる。彼女は五年ほど前、酒屋の一升瓶を盗んでひどい目に遭っている際に源吉に助けられた山窩の女であり、それ以来彼女は彼に好意を持っていたらしい。源吉も彼女に引きつけられ、その後も彼女に会いに行くが、「山の女は里の男に触れてはならない」という山窩の掟の下、山窩の男に襲われ、女は源吉を助けるために抵抗するが結局殺されてしまう、というものである。以下、二人が山窩の男に見つかり逃げるところから、女が殺されるころまで、長いがそのまま引用する。

「わっ！」

という叫び声がして、馬のりになっていた男がころげおちた。

みると、女が、山窩の山刃を振りあげていた。彼女は、源吉を、組み伏せていた男を後ろから、山刃で、ざくつと深くつきさしていたのであった。

源吉は、夢でもみるようにぼんやりと、つつ立っていた。その源吉に、しがみつくと女は、

「私は、小娘の時、あんたに助けられた時から、わたしは、あんたが、好きだった。好きだった。ああ、ずっと好きだった。」

と、いいながら、子供のように声をあげて泣くのであった。

「おーい！」

川上のほうで、叫び声がした。と、彼女は、

「さあ、逃げて……」と、源吉の肩をどすんと、たたいた。二人は、石につまづき、浅瀬の水垢にすべったりして、夢中で走った。(中略)

後ろで、ヒーという叫び声がした。

女の悲鳴である。

源吉は、はっとした。後ろをふりかえったが、一緒に走っていたはずの女がいない。

「おーい。」

叫んでみたが、返事がない。彼は胸がドキツイタ。一町もあともどりしたが、女は、うつぶせになって倒れていた。

「おい、しっかりしろ！」

彼は女をだき起こした。

女の心臓の真上あたりに、山刃がぎっくり、突き刺さっていた。彼女は、叫んだ時のまま、口を開き、つぶらな瞳を、くわっと見ひらいたまま、恐怖の表情を凝固させて、もうすっかり息の根が止っていた。

(「掟の下の子」 p299・301)

この作品、また先にも挙げた他の作品にも共通することだが、偶然山や野に迷い込む、または出掛けて行った一般人の男がそこで美しい山窩の女性と出会い、親しくなったり関係を持ったりするが、大概は屈強な山窩の男に間を邪魔され、両者が切り離される結末を迎える。これはこの作品に出てくる山窩の男の台詞にある「山の女は、里の男にふれてはならぬ掟」に基づくものだと考えられる。このような「掟」が実際にあったかどうかは明らかにはなっていないが、この「掟」が棕の後期山窩小説を構成する重要な要素になっていることは間違いないだろう。このように後期の山窩小説は、それ以前のものとは異なり一般人の男と山窩の女という、ある種別世界の人間達の恋愛模様を書いたものになっている。

また棕の山窩小説を全体的に見て、山窩の仲間内から見た女性と一般人から見た女性との姿の違いがあるのも特徴的である。山窩の女性がほどよく肥え健康的な姿をしているのは共通しているが、山窩の男性から見た女は気が強く、性的誘惑によって妖艶な雰囲気を出している。一方、一般人の男性は山窩女性に対して神秘的な印象を持ち、小麦色、あるいは白い肌、細い腕、つややかな髪など容姿の美しさを真っ先に見出している。どちらの男性の目を通して女性を称える表現が用いられているが、山窩女性の生態をほとんど知らない一般人男性の方が、山窩女性に対する未知のイメージによって、

よりその姿が神聖化及び美化されているのではないかと考えられる。

以上、後期の棕の山窩小説を見てきた。これらの作品は、一般人の男が山窩の女に会い、魅了されることから始まり、二人の距離が徐々に縮まっていくが、女を狙う山窩の男がその間に入り女を引き離すか、一般人の男が山窩の男に圧倒されて逃げてしまうという形式がほとんどである。また一般人男性の目線で書かれた連作では山窩の女性を、一度気に入った男に激しく執着し、命をも投げ出して男を庇う愛情の深さを持つ一面がある一方、関心が失せてしまったり男の弱々しさを目の当たりにして愛が冷めてしまったりすると、あっさりとその男を捨てて姿を消してしまう冷淡さを持つ人間として描いている。このように後期山窩小説は、作品や人物のパターンがほぼ確立されていると言って良いだろう。棕の後期山窩小説群は、山窩女性のミステリアスかつ美しい様子と山窩男性の雄々しく気性の荒い様子とを一般人目線で見ることでより強調しつつ、未知の山窩の世界を読者に寄り添った視点で展開しようとしていたと考えられる。

第2章 実際のサンカと小説の中の山窩

1 実際のサンカと棕の作品内の山窩の比較

前章では、棕鳩十の書く山窩小説の特徴について見てきた。彼が描いた「サンカ」という山の民は決して架空の存在ではない。サンカはその起源については諸説あるが、昭和二十年代までは日本に数万人近く存在していたと考えられており、第二次世界大戦の終結から徐々に姿を見せなくなったようだ。つまり、棕は実際に彼が生きている間に存在していた民族を主題とした野性味溢れる小説を書いていたのである。棕の描く山窩は「十分に調査と周到な準備の上に、山の民として生きる人間どもの心を追求したもの」⁽⁹⁾、「特殊な、一般人のうかがい知ることのできない未知の世界をよく調査し、事実に基づいて書いたというだけでなく、なによりもヒューマニスティック(人道主義的)なとりあげ方が評判をよんだ」⁽¹⁰⁾と評されているように、野生の迫力に富んだ山窩の姿や一個の人間としての山窩の心情を丁寧な描写に出している。また『山窩調』や『鷺の唄』の冒頭で自らを「山窩の末

裔」と称し、実際はフィクションであるにも関わらずそれを読者に信じさせてしまうほどに、彼の書いた小説は山の民のリアルさを表出していた。しかし棕自身は、山窩小説を書く上で山中の部落に入り込んで山窩の伝説的な物語を聞くなど、熱心な取材のもと作品の構想を練る一方、それらを参考にしつつそれを全て事実として書くのではなく自らの手で彼らの生活についての想像を膨らませ、物語を創出することにこだわりを持っていたようである。⁽¹⁾つまり棕の山窩小説に出てくる山窩は、現実のサンカと棕の想像するフィクションの山窩とが入り混じった姿なのである。実際とは違う山窩の姿を創造する彼のこだわりについては後で詳しく述べる。実際のサンカとは似て非なる人間を描いているにも関わらず、読者に「リアルな山窩」を感じさせたのはどのような点によるものなのであろうか。

この章では、棕の書いた山窩小説への理解をより深めるために、日本にいた山の民の事態を先行研究を参考にしつつ見てみる。さらにかつて実際に日本で生活していたサンカと棕の小説の中の山窩との類似する点や異なる点を調べてみる。また、棕が実際のサンカをもとにフィクションの山窩を作り上げて作品を書いた意図についても、ここで考察していきたい。なお、この章では便宜上日本に実在していた山を渡り歩く漂泊民を「サンカ」、棕鳩十の創作上の漂泊民を「山窩」と表記する。

1・1 サンカと山窩の生活様式

はじめに実在したサンカと棕の創作上の山窩との生活様式の違いについて見てみる。まずサンカの生活様式についてだが、筒井功が実際に山窩生活に身を投じていた人やその周囲にいた人々に取材をし、日本における山窩の生活ぶりを著書『サンカ社会の深層をさぐる』にまとめている。それによると、サンカは農具である箕や簞作り、棕櫚箒といった竹細工作りなどの職能集団、または正月に行う春駒や大黒舞をはじめ人形回し、綾子舞などをする芸人、犬飼いなどの職を生業として生計を立てていたとされ、中には乞食として人に衣食を恵んでもらう者もあったようである。⁽²⁾また、沖浦和光も調査や聞き取りを行

い、次のようにサンカの生態をまとめている。(13)

「サンカ」と呼ばれた人たちの主たる生業は、春から初秋にかけては川魚漁だった。そして寒さの厳しい冬場は、箕作りなどの竹細工や棕櫚箒作りがおもな仕事だった。遊芸もするようになったのは、明治期になって、定住するようになってからだろう。

(中略)九州や関東のサンカと呼ばれる人たちは、箕作りが主であった。

住んでいる環境や季節によって違いはあろうが、主に箕や竹細工、箒や簾の製作、そして川魚やスッポンなどを捕まえる漁などを行い、製作物および収獲物を町や村に赴いて売ることが彼らの生活の活計となっていたのである。箕に関しては製作だけでなく修繕も行なっていたようである。後にも触れるが、箕は高価かつ壊れにくいものであるため一年に何度も同じ所で修繕することはなく、サンカ達は様々な地へ移動しつつ修繕の注文を受けていた。これらの職は男女で役割を分担することもあり、箕の製作・修繕は男性も女性も行うが、箕の修繕の注文聞きは女性の役目であった。また川魚は男性が行い、獲れた魚は女性がそれを籠に詰めて売っていた。そして、売ったものはお金やお米などと交換され、彼らの生活をこれで成り立たせていた。川で獲った魚や山の中で採れる植物などを自らの食物にすることもあっただろうが、それだけでは近代社会での生活を維持することは出来ない。これもまた後述するが、サンカは近代国家の政策の变革によって定住を推奨されていたため、完全に一般社会と隔絶した生活を送っていたわけではなく、部分的に社会と関わりながら生活を送っていたのである。漂泊しながらも近代社会の中で生きていくために、「サンカは自然採集を中心とした生産者であり、同時に商品販売者でもあった」(14)のである。

次にサンカの住まいについて見てみる。柳田國男は自身の研究の中で「彼等の簡易なる建築にては、風呂敷はすなわちテントにて、油紙は常にこれを所持しこれを重ねて雨水を凌ぐ。家具としては二三の食器刃物などあるのみ、その他は至る処自由に採取調達して用

を弁ず。」⁽¹⁵⁾と述べている。彼らは一定の場所に長く住まないため、簡易的な天幕、いわゆるテントを用いてセブリ(住まい、あるいは住まいを設ける場所を意味する語であり、漂泊生活者の間で使われていた)⁽¹⁶⁾をしていたようである。天幕の他に、布切れを継ぎ足して作る「テンパリ」や、茅葺き屋根を直に地面に置いたような見た目をしていて篠竹や藁などを使って作られた「ワラホウデン」がサンカの一般的な住居の形であったと考えられる。また、古塚や自然の洞窟、神社のお堂、橋の下を拠点とする者もいたようである。さらに、沖縄が尾道の山の部落で暮らしていた村上光代から聞いた話も、サンカの生活に共通する点がある。⁽¹⁷⁾

急に川が増水しても水がこない河原で、竹を柱にしてテントを張った。テントは、二斗袋という朝鮮米を入れる荒目の袋を集めて、二枚重ねで雨をはじくように継ぎ合わせ継ぎ合わせて作った。テントの中の広さは六畳ほどで、夏場だからすき間も作って風が通るように工夫した。

橋の下でもよく泊まった。台風がやってきて水の出そうな時には、高みにあるお宮の軒先を借りた。また、農家の灰小屋を借りて、持参のゴザとワラをもらって下に敷いて、その上に借りたムシロを重ねて寝どこを作った。

サンカがこのような簡素な作りのテントや橋の下、お宮の軒先などでよく生活を送っていたのは、移動のために長居する必要が無かったから、また風雨がしのげて、ある程度の快適さが確保されていれば十分と考えていたからであろう。移動の際に持ち運ぶ荷物にしなくても必要最低限しか持たず、風呂敷などに包んで背負うか、リヤカーを使用して運んでいたようである。また、サンカは定住地がないため戸籍が無く、学校にも通えなかったために文盲である人が多かった。ただ、時代が下るにつれて完全に定住し始め戸籍を取得し、学校に通う子どもが増えていった。定住の第一歩として、山守、野守、宮守などの番人、馬捨て場の管理などの役職を務め、その代わりに山や宮などに定住する権利を得ていたの

である。

サンカの生活様式のまとめとして、日本列島でサンカが見られなくなった後にも中国山地の裾野で続いていたサンカ民俗の伝承と特徴を挙げる。サンカは大自然に依拠しながら生きてきたため、自然の生態系を熟知していた。魚の乱獲を行わず、竹細工作りで必要な材料の品質も優れた目利きで見極めていた。また夫は川漁、妻は獲れた魚の量り売りというように夫婦の役割分担を中心に、家族内の分担システムも構成されていた。さらに、将来の安定しない生活をしているため、サンカの組織は助け合いのためのヨコの連絡をとっていたようである。⁽¹⁸⁾このように彼らは自然や一般人が住む近代社会に依拠しつつ、サンカ同士で助け合いながら山や野を巡り歩く漂泊生活を送っていたのである。

一方、棕の創作した山窩の生活様式を見てみよう。棕の山窩の主な生活の活計は盗みと狩猟である。まず盗みについて、前章でも述べたが、鳥や子犬や猫を盗んで来て食糧として、馬を盗んで来て商売人と取引をする描写が見られる。また狩猟については兎や雉、鷺、魚などを殺したり捕まえたりして食糧にしている。例として、川で魚を取って食べる姉弟の一場面を挙げる。

小僧っ児は、腰程の深さの溪川を自由に泳ぎ廻って、折々水中にもぐり込んだ。

水中から顔を出すと、彼は、空色の斑点をもった、天の魚、と云う素晴らしく美味な、素晴らしくよい香りのある、そして又美しい魚を掴んでいた。

そいつを、小さい歯で、ぴつ、と引き裂いては、シャリシャリと食った。(中略)

天の魚を受け取ると、女は、真っ白いキチキチした歯で、背中に噛みついた。魚は尾を力いっぱい左右に振った。女は歯に力を入れて、ぐっとそれを引き裂いた。魚は尾を振りながら真っ二つにぴりぴりとやられてしまった。

女は、そいつを、シャキシヤキと噛んだ。噛んで、噛んで、噛み砕いた。

(「炎颯(なつあらし)」 p208・209)

このように、山窩達は自然の中にあるものだけで自らの生活を成り立たせている。何か職に従事しているわけでもなく、町や村に農具や竹細工、また山や川の収獲物を売ることもない。盗みをする以外に一般社会と関わることはほとんどないと言っているだろう。

住まいについては、実際のサンカと大きな違いはない。「天幕をばたたと折り畳んで背中に背負って出発の用意を始めた。」（「朽木」 p15）というように、棕の山窩も同様に天幕生活が主である。また、「吾々は「へだまの太木」の下に天幕を張った」（「打たれた鷲」 p97）というように山窩は自然に出来た穴や木の下などを利用することもあるが、「岩公の親父や私の親父は、此処で冬を越す支度を始めて、臨時の幕をたたんで、穴を掘ったりした。」「雨水がはいらぬように、土から二尺程上った所から、幅一間高さ四尺程の大きさに。」（「山の鯨」 p53）、「中には落ち葉が布団がわりに集められて」（「山の鯨」 p44）という描写から見られるように、自分たちで穴を掘ったり落ち葉を敷き詰めたりして居住空間を作ることが多いようである。荷物を必要最低限しか持たないところも現実のサンカと共通している。「おこんは器用にくるくると荷物をかたづけた。細引でキリッとして、小ぢんまりした二個の荷物。」（「山のトンビ」 p68）という描写や、

そして彼等はいそいそと荷造りを始めるのだ。

荷造り……と云った所で、彼等の全財産ひっくり返しても一撮にも足りない。

キリッとくくって、一人の肩にかかるがると乗る程の、ふりわけの荷物。

これで全部。

（「老山窩と娘」 p159）

という文章から、彼らがわずかな荷物だけを持って漂泊の旅をしていたことがわかる。先にも見たように、食糧などを現地で調達すれば生活が出来るため余計な荷物を持たず、移動が楽になるように出来るだけ身軽な装備で旅をしていたのだと考えられる。

生活様式だけを見ても、棕の小説内の山窩は現実のサンカよりもさらに社会と隔絶

された環境の中で野性的な生活をしていることは明らかである。山窩は程よい距離感を保って一般社会の人々と交流をしていたサンカと似通った点を持ちながらも、より野蛮な印象を受ける。ましてや一般人とは全く別の種族であるかのような生き方をしていることが、*棕*の作品の随所から見て取れる。

1・2 サンカと山窩の葬儀

次にサンカと山窩の葬儀の方法について見てみる。サンカは一般人が行うような火葬や土葬は行わなかった。栃木県鬼怒川辺りで生活していたサンカ経験者の話によると、サンカが死んだ時には「棺など使わない。遺体を窪みの底に置いて、その上に土を軽くかぶせるだけである。(中略)「風葬」あるいは「林葬」に近いものだった。いや、あからさまな言い方をすれば「放置葬」とでも呼⁽¹²⁴⁾ばれるようなものであったという。⁽¹²⁾「風葬」、あるいは「放置葬」は穴を掘ってそこに遺体を埋める土葬とは異なる。「遺体は「山の中へぶん投げられていた」といわれている。これがたぶん、ある時期までの彼らのあいだで一般的に行われていた「送葬」であつたと考えられる。」⁽²⁰⁾、「大正時代には仲間が死ぬと、近くの「馬捨て場」に放置していた。野ざらしに近い状態で風化するにまかせていたのだ。」⁽²¹⁾というように、遺体を適当な場所に置いておいて風化させる方法をとっていたようである。また彼らの間には仏教や神道などの宗教的思想がなかったためか、死者を丁寧に供養することも、墓地や墓標を置くこともなかった。時代が下るにつれて、サンカが死ぬと役場の計らいによって共同墓地に葬られることはあつたが、サンカ達自らが火葬や土葬など一般的な葬儀の方法をとることはなかったのである。サンカは一人一人の死を弔うことはせず、「風葬」あるいは「放置葬」によって死んだ者を自然に還す方法をとっていたと考えられる。

次に、山窩の葬儀方法を見てみる。山窩の葬儀は前章の山窩の死に対する意識のところでも触れたが、穴を掘って遺体を埋めることはせず、遺体の上に落ち葉を被せて放置するという方法をとっている。このやり方はサンカの「風葬」のやり方に近い。しかし山窩に

特有な点もある。それは仲間が死に至るまで優しく見守ることはせず、弱って移動ができなくなった時点でその者に最低限の食物を与え、落ち葉などで寢床を作り、その場に置いていく点である。「貧しい袋の中から食物と食をひとつかみ掴み出して彼女の側においた。女達は体のきかなくなった老婆のために落ち葉を集めてふかふかする床を作った。婆さんは落ち葉の床の中に焚木ととぼしい食物と共に残された。」（「朽木」 p16）というように、食物や焚火、落ち葉の床などを手向けて弱った者を放置する。これは山窩内の通例となっているようで、「彼女が動けなくなったのを発見すると、後に残して行く人間に対する礼儀として、吾々は落葉の床を作ってやった。」（「盲目の春」 p36）という一文から、善意で行なっているというよりは、このように動けなくなった者を置いていく際はこのように手厚い対応をしてから去るのが彼らの礼儀であることが分かる。また椋の小説中では、山窩仲間の死の様子を目の当たりにする例は少なく、仲間の死体を処理するよりも、弱った仲間到手向けの品を与えてその場を立ち去ることが多い。その際、「彼(彼女)は明日には死んでいるだろう」というようなモノローグが差し込まれることによって、直接的に死を表現するのではなく暗に死をほめかしている。このことから、山窩は仲間の最期を付きつきりで見届けるようなことはせず、その前の状態、つまり死に瀕して動けなくなった時点でその人を放置しておくことが多いことが明らかである。それは仲間に対する情が薄いためではなく、漂泊生活を送る上で動けなくなった者によって旅に支障をきたすことがあるため、そういう者達を放置していくことが山窩内の暗黙の了解であったからではないかと考える。

1・3 サンカと山窩の出産

次に、現実のサンカ女性と創作上の山窩女性の出産の様子をしてみる。まず実際のサンカの女性の出産について、彼女らは一般人の女性がするように、助産師の手を借りて出産することはなく、新生児の取り上げからへその緒の切断、その後産湯につからせるなどの一連の出産に伴う行為を全て一人で行う。その例がいくつかある。一つは、聞栃木県矢板

市や同県塩谷郡塩谷町などでセブリをしていた女サンカ須藤シマの話で、筒井が彼女の兄妹の子どもである須藤カヨから聞いたものである。(22)

シマは出産の折り人の手を借りたことはなかった。三人の夫とのあいだにもうけた七人の子は、ぜんぶ自分一人を取り出したのである。これは彼らの社会ではごくふつうのことであり、なにもシマにかぎったことではない。

一人で出産の全てを行うのは人手が足りなかった訳ではなく、サンカの社会では「当たり前のこと」だったのである。また、須藤カヨの話には「そうして出産後、一週間もたたないうちに、もうふだんどおりに働いていたのだった」(23)ともあり、一人で出産を行ったとは思えない、驚異的な産後回復を見せている。

もう一つは、鷹野弥三郎の著書『山窩の生活』の中の、京都府北部口大野(現在の中郡大宮町)に住む男性から鷹野弥三郎に寄せられた手紙にある近畿地方西部のオゲ(サンカの別称の一つ)の生態である。(24)少し長いがサンカの生活を非常に詳細に記しているため、そのまま引用する。

先年小生播州宍粟郡に仮寓致居候際、漁業を事とせる五歳位の男児を伴える夫婦連れの「オゲ」と釣魚の事より一言二言言葉を換す中以後追々と心易くなり候。彼は村落より五町程距りたる河原に天幕を張り四箇月余り住い居りしが其の妻は当時妊娠中にて候いき。

或日道路を迂回して彼を訪ね候所、来月が臨月らしければ、分娩まで此所が動けぬ次第なりといければ、小生は分娩に対し入用のものあらば何なりといひ越す方よろしくといひ置き帰りしが、其れよりも一箇月余過ぎし日近所の人の「彼の山窩の妻は昨日あたり分娩した様子なり」との事をいひ越しければ、小生は一種の好奇心にかられ、翌日午後彼を訪ひ鶏卵少々を見舞なりとて与えしに、喜びて之れをう

けたり。妻は如何と見れば既に起き出でて嬰兒に湯浴させんとの様子なり。ソナに早々立働いても大丈夫かといえど妻は答えて「私等の身体は子供を産んで後で寝る様な弱い事はありません昨日から起きて居るのです」と驚くに耐えたり。

又一入驚くに耐えたるは其の嬰兒の浴法の乱暴さ加減なり、如何となれば古びたる布切にて無造作にキリと捲きたるを引抱え、傍の川辺へ赴き布をとりて裸体となし流れの水中にザンプと入れ、暫時にして引き上げたり。時は朝霜をおく十一月下旬の冷めたき折柄なるに小生は言語に絶えたる此の荒行を目の当り見たる事として「君達は子供をソナ乱暴にして殺す心算なりや」と詰りしに、彼は言下に答へて中々左にあらず、吾々仲間の子供温湯にて産湯をさすが如き事は譬え酷寒中といえども之れなく皆冷水にてなす、湯で浴さす様な児は到底頑健なるものにはなれず。依て皆冷水浴をなすなり、現に此の長男の如きも温浴をさしたる事嘗て一度もなし、されど一度も風邪等に冒されたる事なし」と、聞けば一理なきに非ず。

この話でも、サンカの女性が誰の助けも借りずにあつさりと出産を済ましてしまっており、その翌日にはもう動き出している。サンカの妻の言葉にもあるように、出産後しばらく寝て休んでいるような弱さを持つ者は、明日も定かではないサンカの生活をする事は出来ないのだろう。彼女らの強さは、過酷な日々を生き残る漂泊生活からきているのではないだろうか。また、彼女らは生まれたばかりの赤子を産湯ではなく冬の冷たい川の水に浴びせている。新生児に「丈夫で健康な子どもにさせるために冷水浴をさせる」という一見荒々しい健康法をさせているように思えるが、これも一年中休まずに各地を転々とし、箕作りや川漁などを行なって毎日の生活を維持できるような健康な体を持つことがサンカには必要不可欠であったためではないかと考える。

棕の山窩小説でも女性が一人で出産を行う描写がある。その例として、「霜の花」の女性の出産シーンを挙げる。

杉の枯葉に火をつけようとした時、大きな陣痛が差し込んで、彼女はそのまま俯向いて、ウンウンと唸ってのたうち回った。

つづけざまに大きな痛みが来て、股の間に何かぬるんと出た。女は右手で触ってみた。と一本の小さな足をつかんだ。彼女はこれはいかぬと思った。目を閉じて、出てきた足を又腹の中にぐっと押し込んだ。

直ぐ陣痛が来た。女は声をあげて、木の葉の上を這い廻った。

ぬっと、又子供の足が出た。それを、前のように腹の中に押し込んで唸った。女は夢中で声をあげた。穴熊のようにうずくまって狼のように悲しい声をあげつづけた。

そのうちに体からかたまりがぬるぬると出た。女はホッとした。

が、女は氣丈夫に山の民の慣習に従って、頭髮を三本引き抜いて、それで臍の緒を切った。

（「霜の花」 p79）

この場面では、一人で出産することは疎か、逆子で産まれてきそうな赤子を胎内に戻し込んでその状態を直そうとすらしている。山窩の女性も誰の手も借りずに一人で逆子を直し、子どもを産み、そのへその緒の切断までを済ませているのである。これは実際のサンカの姿と一致している。その一方で、他の作品でも描かれているように女性の強さをより際立たせるための表現の一つとして、この場面を書いたとも考えられる。また「黄金の秋」という作品では、女の出産に際して夫が慌てて谷川に水を汲みに行く描写が差し込まれている。ここから、棕の小説では現実のサンカが赤子の湯浴みをお湯ではなく水で行なっていたことも忠実に再現していたのではないかと考えられる。

1・4 サンカと山窩の移動

この節では、サンカ及び山窩がどのような場所に移動していたのか、何故移動を行なっ

ていたのかについて見ていく。

柳田國男はサンカの移動方法について、「彼等はジブシイなどと異なり決して大群をなさず力めて目立たぬように移転す」⁽²⁵⁾と述べている。さらにサンカは夏は北か山の方、冬は南か海辺の方へ移動することや、水が得やすく、魚を捕らえたり漂流物を拾ったりしやすい、遠くから人に見られにくい、川除地に竹藪が多く竹細工や箕作りをするときに都合が良いなどの理由から最も河岸を好んでいることも指摘している。このことから、サンカは目立たないように基本的に一家族程度の少人数で移動し、鳥の渡りや魚の回遊と同じように、彼らも季節によって住む場所を変えていることが分かる。また、「サンカと呼ぶべき集団は、趣味や、わけのわからぬ衝動に駆られて移動を繰り返していたのではない。それは、彼らが従っていた生業のしからしむるところであつた」⁽²⁶⁾という筒井の言葉にもあるように、サンカの移動には前述した彼らの職業が関係している。一般人や警察などに目をつけられないようにという理由もあるだろうが、箕や竹細工、魚などの商売の競合が起こる可能性があるために数組のサンカの集団がまとまって移動することはなかった。また沖浦が調査した中国山地のサンカは、それぞれ自分達の商売をするための「回遊路」や「得意場」を持っていた。一つの場所で箕の作製及び修繕、また川漁などをして生計を立てるには限界があるため、同じ場所に長期間留まることは少なく、短くて二、三日、長くて二、三週間ほどで他の得意場へ移った。その際は毎年同じ回遊路を辿りつつ自らの持ち場に移動する。彼らはそれを毎年繰り返すことによって培ってきた信用と彼らの持つ技術で得意場を保持していたのである。⁽²⁷⁾さらに、前節でも触れたが、明治中期までには政策の改革によって大半のサンカがいずれかの村里に籍を置いていたとされ、無籍のまま過ごしていたサンカは少なかつたと考えられる。ただ定住地に住むようになってからも、一年の半分は旧来の得意場を巡る半漂泊型といわれる形態で生活を営むことが多かつたようだ。⁽²⁸⁾このように、サンカの漂泊は「基本は顧客を求めて毎年おとずれる、そう広くない範囲のかなり規則的な「回遊」にあつたといつてよいだろう」⁽²⁹⁾という筒井の考察のように、日々の生活を維持するために極めて計画的に決まった場所を訪れる規則的なものであつた

のである。

一方、創作上の山窩の移動はどのようなものだろうか。宮下が「柳田国男によれば、サンカはいわゆる候鳥のような移動によって生活の場を変えるのだが、棕の小説に登場する山窩は、全て山中を舞台としている。」⁽³⁰⁾と指摘しているように、棕の描く山窩は山から山へと移動している。住処を変えるにしても、山奥や山中の大本の下、河原などを転々としており、山から村や野に降りてくることは盗みをする以外にはほとんどない。そのため、山窩小説の中で山窩が漂泊するのは生業のためというよりも狩猟、採取に適したものであるためであるように思われる。サンカのように商売などを通して、部分的に一般社会に依拠して彼らなりの役割を持って生活することが必須なわけではなく、余程生活に関わることで以外で一般社会と接点のない山窩達は、基本山の中だけで生活が完結してしまうのであろう。彼らにとっては山窩の群れの中で自らの生活を維持出来ればそれで十分なのである。

また前章でも触れたように、彼らが山を移動するのには商売をする、得意場で各々の作業をするといった明確な目的はない。むしろ彼ら自身に移動をする理由はこれといってなく、「何だか分からないが旅に出たい」という感覚で漂泊をしている様子が見られる。つまり、その時の気分や直感を頼りに山の中を漂流し続けているのである。山窩が山を漂泊するのは生活の活計を得るためというよりは、彼らの心にある旅に対する欲求を満たすためであると言える。一般人とは別の、元来「山を生きる者」である山窩の野性的かつ直感的な生活を、棕は意識的に描いていたのだろう。

1・5 サンカと山窩の男女関係

次に、サンカと山窩の男女関係、またそれに関する掟について見てみる。

筒井はサンカの生活を調査、取材していく中で「彼らは、ずっと仲間うちで縁組みを繰り返してきた。(中略)内部の者どうしでの縁組み、これは彼らにとって自明のことであり、そのため年齢的にはやや不自然な組み合わせが、よく見られた。」とサンカの縁組みの特徴

を明らかにしている。⁽³¹⁾また、「年齢的にやや不自然な組み合わせ」として、「母親と息子のような、あるいは年の離れた姉と弟のような縁組み」などを確認している。⁽³²⁾サンカは主に群れの中の者たちで縁組みをしていたが、サンカとの距離が近い農民や娼妓などと関係を持つこともあったようだ。⁽³³⁾このことから、サンカの男女関係は非常に閉鎖的なものであり、基本は同じサンカ同士、またはサンカと比較的立場や距離の近い者と関係を結んでいたことが分かる。そして内部での縁組みを繰り返すために、必然的にサンカの家族はほとんど近親者同士になることが多かった。そのために、サンカ全体にある種の一つの家族のような意識が芽生え、前述した強固な「助け合いのためのヨコの繋がり」が出来ていたのではないかと考える。

また、男女関係にまつわる掟について、鷹野弥三郎の『山窩の生活』では、サンカ内には整然とした規律があるとする記述がある。以下はその引用である。⁽³⁴⁾

彼等山窩の男女間の関係は中々厳格に守られている。仲間の未婚の女に対しては、誰れ彼れとも挑みもする。又は夫を失った女は可なり濫らな事もするが現に仲間の女房であるものに対しては、決して相冒す如き事をしない。その夫が警察署の為に捕えられて何年懲役に行つて居ようが、其の間は互に相扶け合つて、決して秘かに通ずるような事はしないのが通例になっている。それは姦通者に対しては両者ともし仲間の者が寄り合つて、惨殺即ち彼等の言葉でいう「アヤメル」という事が、殆んど彼等間の一種の掟になっているからであらう。

鷹野の調査では、サンカの男女関係は非常に厳密なもので、男性は既に夫婦になっている仲間の妻に手出しをすることは、夫が警察に捕まり懲役に服している間であつたとしても決して許されないとしている。そして、万が一その規則に反する者がいた場合は仲間内で罰として惨殺されるという。このようなかなり厳しい掟を定めることでサンカ内の統率をとっていたと当時は考えられていたようだ。

しかし近年の研究では、サンカの中にはリーダー格の者が存在することはあったが、「親方の支配下でのタテ型の組織、仲間内の厳しい掟はなかった」と考えられている。⁽³⁵⁾ 残酷な罰を与えるほどの厳しい規則は無かったが、サンカは基本一夫一婦制であること、加えて群れとしての仲間意識があるために不倫を許さない風潮はあったようである。しかし、そのような風潮があったにも関わらず暗に不倫も横行していた。ただ、大正期のサンカ研究で考えられていたように必ずしも不倫を行なった者に対して厳しい処罰を与えていたわけではなく、不倫された夫が相手に対して警告するだけで済ませていたこともしばしばあったようだ。⁽³⁶⁾ これらのことから、サンカは少数社会であることから血族結婚をしていた者が大多数であったということ、また基本一夫一婦制で夫のいる妻へ手出しをすることはタブー視されていたにも関わらず、不倫が暗に横行していたことが分かる。

棕の山窩小説でも山窩の狭いコミュニティ、そしてその中の未婚の女の奪い合いがほぼ忠実に描かれている。また若い少女と存在感のある屈強な男とが夫婦であるというように現実のサンカでも見られた「年齢的に不自然な組み合わせ」の夫婦の例などもある。（「山の鯨」）さらに、いわゆる山窩の厳しい掟も存在しており、前章で触れた「山窩の女は村の男にふれてはならない」という掟に反した者や、人の物を盗もうとした者、幕の親方を殺してしまった者は無残に殺されたり、他の幕の者にずっと目をつけられたりする。それだけではなく、群れの夫婦関係にある女性に他の男性が手出しをすることも許されていなかった。「幕の女」という作品では幕の親分の妻になった女と思いが合っていた男が逢瀬を繰り返していたことが仲間に見つかってしまい、逆さ吊りにして谷底に落とされるといふ刑罰を受けている。他の男の妻に惹かれたり女の方から誘惑されたりして関係を持とうとする、あるいは関係を持つ作品はいくつか存在する。中には女欲しさに夫を殺してしまう例もあるが、大抵は夫に手厳しい仕打ちを受けている。このことから、棕の描いた山窩も夫を持つ女性に手出しをすることは基本的にタブーとして描かれていたのではないかと思われる。しかしそのような掟があるからこそ事件が起こり、物語の展開がより劇的なものになる。この厳しい掟は、棕の作品の中では物語を構成、展開していく上で大切な要素の一つに

なっているのではないだろうか。

その一方で、前の章でも触れたが他の幕と落ち合ったとき妻や夫を他の者と取っ替え引っ替えする話（「春の日」）もある。これは実際のサンカの生態にはないものであり、山窩はより性に関して奔放であることが強調されている。

全体を通して見ると、棕の山窩の男女関係や掟は現実のサンカのものと同通っている印象を受ける。しかしその一方で、山窩の野蛮さや一般人とは隔たった世界に生きていることを強調するために、より放埒な男女の関係、そしてそれに対する過激な報復が描かれている。

1・6 サンカと山窩の犯罪

次に、サンカ及び山窩の生活と関連する犯罪についてこの節で見えていく。

サンカと犯罪が強く結びついた言説が特に多く現れていたのは明治後期から大正期、昭和初期にかけてのことである。代表的なものとして、前にも挙げた柳田国男の『「イタカ」及び「サンカ」や鷹野弥三郎の『山窩の生活』、三角寛による『山窩血笑記』『山窩血笑記』をはじめとしたサンカ小説群などがある。それらの言説では、サンカがどのような者達として記述されていたのだろうか。例として、新聞記者であった鷹野弥三郎が警察署に出入りして手に入れたサンカの犯罪者的な側面を書いた『山窩の生活』を見てみよう。

『山窩の生活』では、サンカの残虐性、また非人道的な生態、そして彼らの犯した犯罪の数々を解説している。それによると、サンカは頻繁に人家に侵入して強盗、殺人などを犯し、時には警察官にも威嚇し襲いかかることもあるとしている。またサンカの漂泊性に着目し、彼らが今まで過ごしていた場所から別の場所に移動する際に、セブリをしていた場所の近くの村落に赴き犯罪をはたらくという記述もある。その際大半の山窩が先に別の場所に移動して逃げ場を確保し、一部の人だけ残って盗みなどを働いてから逃げるという策略をとっていたと考えられていたようである。

サンカの性格についてもいくつか記載されている。彼らは排他的な性質を持つが、仲間

思いで平等徳性があるとする一方で、鷹野は以下のようにも述べている。(37)

彼等には又彼等としての種々の希望や、欲望もあるらしい。それは彼等が、何よりも生きて行くという事の強い欲望の然らしむる処であろう。草木の如く、鳥獣の如く、生命の持続に対しては、力強い根を有している。其処に先づ相当の食物欲がある。奔放溢れるやうな性欲がある。食う事、女に接触する事は、獣のやうに奔溢するのである。

非常に強い生存欲求のために、本能の赴くままに並外れた食欲や異性への性欲を発散させる乱暴な性質を持つことを強調しており、まるでサンカが一般人とは異なる民族であるかのような記述である。

また、『山窩の研究』よりも前に発表されている『イタカ』及び「サンカ」の中でも、柳田は大垣警察署長広瀬寿太郎への取材を通して、サンカの主な職業は窃盗であり、簞や箒、箕、竹細工の販売や川魚を獲るだけでは補い切れない部分を他人の所有物から盗って補充していたと推測している。(38)

柳田や鷹野、三角によって発表されたサンカ論には共通する点がある。それはこのような犯罪者の側面を持つサンカの情報を警察から得ていたことである。彼らのサンカ論について、塩見鮮一郎は以下のように述べている。(39)

今日流布しているサンカ像に大きな影響を与えたサンカ論がいずれも警察を情報源としている(中略)そこで耳にしたことを中心にし、自己のわずかの体験を付加して書いているのである。柳田国男もまたそうであるなら、サンカについての基本的なラインは、「山窩」という「あて字」をふくめて、警察官僚のリークしたものになる。

このような「犯罪を犯すサンカ」像は、警察による情報から端を発し、それを新聞記者

である鷹野や三角などが新聞に掲載したり、柳田が取材を行い論文として発表したりしたことによって広く知れ渡った。そしてこれらの言説は当時多くの注目を浴び、多くの人々にサンカの残酷性、犯罪者の側面を強く印象付けたのである。ただ近年の研究では、サンカが残酷な犯罪行為を行っていたという当時の言説に疑問視するものも増えている。警察の情報や報道によって広まったサンカに対するイメージや、それによるサンカへの影響については次節で詳しく述べる。

棕の作品内の山窩と犯罪の関連性はどのようなものか。前章、また今章章1・1節の山窩の生活様式のところ本章1・1節でも触れたように、山窩は盗みによって生計を立てている。馬や犬、猫など飼っている生き物を村から盗み出したり店に入って食料をくすねたりする山窩の姿が作中で度々描かれている。このことから、棕の山窩小説の中の山窩は犯罪との関連性が強いことが分かる。これは、彼らが山での過酷な生活を生き残るために必要なものを得る手段として盗みを行っていたためである。また、盗みを行なうにあつての山窩の心構えを示す台詞が「打たれた鷲」という作品の中にある。以下はその引用である。

―物とりの名人は、取られた相手が取られた事を知らずにいるようにやることだ。物とりの極意は発見されても手向いせずに逃げることだ。何故って、俺たち山の人間は同じ村を幾度もおそわなければならないからさ。俺達がやりそくなっても、又俺達の後に来た仲間が仕事をせねばならんからなあ。ところが、一度俺達が里の奴等の頭の鉢に山刀をぶち込んで見な、俺達の仲間は百年間はその村に寄りつかねえだ。

（「打たれた鷲」 p103・104）

これは盗みの方法を子ども達に教える際の老人の台詞である。この中に先に述べた犯罪を犯すサンカとは違う点がある。それは、「盗みが見つかったとしても立ち向かわずに逃げること」

である。犯罪を犯すサンカについての記述の中には「殺人を犯す」、「警察官にも威嚇して襲いかかる」とあるが、山窩はそういったことを極力しないようにしている。何故なら他の山窩もその里を訪れて盗みをするためである。一度犯罪が見つかって、派手に暴れると里の人の警戒心を強めて他の山窩が盗みをしづらくなる。つまり、他の山窩の生活に支障が出てしまうと、巡り巡って自らの身にも影響を及ぼしかねないのである。そのために、「盗みをする時はまず見つからないように、もし見つかったらすぐに逃げる」ことを教訓として教え込んでいるのだろう。このことから、山窩内の仲間意識や平等性の強さを感じられる。また、少人数で盗みを行なっている点などは犯罪を犯すサンカのやり方と一致している。相違は見られるものの、先に挙げたサンカ論と共通する点もあることから、棕の山窩小説の創作は大正期、昭和初期のサンカに関する論説の影響を多かれ少なかれ受けている可能性も考えられる。

1・7 サンカと悪のイメージ

前節で明治後期から昭和初期にかけて論じられてきたサンカ論や、新聞各紙で取り上げられたサンカの犯罪に関しての報道の影響によって、世間一般にサンカに対する悪い印象が定着したことを述べた。何故当時の人々の間で日本各地を漂泊するサンカと盗みや殺人といった犯罪が結びついたのだろうか。この節ではサンカに犯罪者としてのイメージが持たれるようになった理由や、それによるサンカへの影響について見ていく。

先にも述べたが、サンカの犯罪者としてのイメージは警察の情報やそれをもとにした報道によって付けられた。このことについてもう少し詳しく見てみよう。鷹野の『山窩の生活』に付せられている塩見の解説によると、明治後半辺りには迷宮入りした凶悪事件、逮捕の失敗、誤認逮捕の弁明などとして「山窩」が新聞紙上で使われることが多かったという。⁽⁴⁰⁾相次ぐ恐ろしい事件や難事件に出くわすと、警察側が「犯人は山窩ではないか」ということを新聞記者にリークしそれを報じたことから、サンカに凶悪なイメージがつけられたものと思われる。また、大正期や昭和初期には、先述した三角寛や鷹野弥三郎のサ

ンカ論によって、大衆のサンカへの好奇心が駆られるようになる。これによってさらに多くの人にサンカの野蛮な姿が知れ渡っていったのだろう。

また塩見は、前節で挙げた鷹野が論じる凶暴性を露わにしたサンカの様相は、近代国家の形成のために戸籍のない浮浪者などを追いついて近代社会の一員として組み込もうとした「山窩狩り」などの方策に対する、サンカから異端とされた人々の反抗心や脅威への対抗ではないかと指摘している。⁽⁴¹⁾さらに塩見の解説では、サンカが減少していく理由について以下のように考察している。サンカは季節に合わせて移動し多様な生業を行っていたが、明治・大正期に警察に追われて生活スタイルが壊され、経済的不自由から民家を襲うなどの凶暴な行動に出る。しかしそれによって警察の追及がより厳しくなったため彼らはサンカとしての慣習を捨てて、近代社会の暮らし方に迎合し戸籍に入って定住するようになった。これがサンカの絶滅に至った経緯だとしている。⁽⁴²⁾この考察でもサンカは凶暴なやり方で最後まで社会に対して抵抗し続けた野性的な面を持つ人々のように捉えられている。

その一方で、実際のサンカに取材をした沖浦が聞いた彼らの話からはそのような凶悪性を感じられず、むしろ当時の潮流が作り上げた犯罪者としてのサンカのイメージに苛まれている様子が見てとれる。⁽⁴³⁾

サンカは、山野河川で瀬降り生活を営んでいる「素性の分からぬ無宿者」であり、さらには「一般道徳が通用しない山の民」である—そういった話が、戦前では広く市民社会に流布されていた。(中略)

それらは根も葉もない世間の噂話にすぎず、その多くは戦前の山窩小説によってバラまかれた虚像であり、フィクションであった。

鷹野や三角の本の影響で、サンカが山に潜む盗賊の意を持つ「山窩」の字をあてられ、隠れてコソ泥をする「陰盗」や押し売りをする「強売」をして村民に被害を及ぼしている

という噂が世間に流布してしまい、尚更サンカは肩身の狭い思いをすることになる。サンカは「自分たちの生産物を商品として買ってもらわなければ生計を立てられなかった。噂されるような陰盗や強売をやっていたら、村人に警戒されて商売もできなくなることは目に見えてい」たのである。⁽⁴⁴⁾また、サンカ達は以下のようにも語っている。⁽⁴⁵⁾

ちよつとでも小盗の嫌疑がかけられると、たちまち信用が崩れてしまう。そうなる
と、衆目が集まる灰小屋や人通りの多い橋の下で、毎年のように瀬降りすることは
できなくなる。そして自分たち家族だけではなく、その地域を漂泊している仲間
も迷惑が及ぶことになる。

本章1・1節や1・4節でも見たように、サンカ達は複数の得意場を「信用」と「技術」で維持し、そこで川漁で獲った魚を売ったり箕の製作や修繕をして生活を保っていた。メディアの情報による影響でサンカに悪いイメージがつけば、どんなに品が良くても売れないだけでなく、村や町の近くに仮住まいをすることも、他のサンカ仲間が再びその地を訪れることも出来なくなる。実際の姿と乖離した犯罪者としてのサンカの印象が、彼らの生活をより困難なものにしていたことは明らかである。

何故このようにサンカに関する言説と実際のサンカに違いが生じていたのだろうか。それは当時盛んに報道されていた犯罪を犯すサンカと、漂泊民としてのサンカは異なる集団であったという可能性が考えられる。礪川の仮説によると、サンカは警察用語、犯罪学用語としての山窩に由来するものである。山窩は明治から大正にかけて山中を拠点に凶悪な犯罪を繰り返した移動性の犯罪集団及び準犯罪集団、つまり盗賊団のようなものであった。犯罪集団としての山窩は、近代以前から箕作りや川漁を業として生活してきた「漂泊民」と何らかの関わりを持っていたとされるが、犯罪集団としての山窩を構成したのは極めて多様な人々であったため、単純に山窩と漂泊民を結びつけることはできない。要は山の漂泊民と山の盗賊団山窩は同じ集団ではないということである。そして漂泊民は近代以前に

おいては地方ごとに「オゲ」や「ボン」、「カワラコジキ」など別々の呼称で呼ばれていたが、山を移動するという類似した性質によって近代以降犯罪集団「山窩」と混同されるに至った。「漂泊民」一般がサンカと総称されるようになったのもこの理由によるものである。⁽⁴⁶⁾ このように山の盗賊である「山窩」と性質が近い漂泊民の「サンカ」が混同されて世間一般に認知されてしまったために、尚更実在したサンカの肩身を狭くしていたのではないかと考えられる。

さて、棕が描いていた山窩はどのような存在だったのだろうか。前節でも述べたように棕の書く山窩は犯罪者としての側面を持っている。棕の山窩小説が出版当時文壇で好評を博したこともあり、サンカの犯罪者のイメージの定着に影響を及ぼした可能性は考えられる。その一方で棕の山窩小説では、犯罪行為よりも自然の雄大さや美しさ、それに取り囲まれた山でのダイナミックな生活を中心に描いている。そして何よりも棕の描く山窩は常に「山を悠々と歩き回る楽しさ」を感じている。つまり犯罪者としてのサンカだけでなく、漂泊民としてのサンカも棕の山窩のモチーフとして含まれていると考えられる。これらのことから、棕の「山窩」は盗賊としてのサンカと漂泊する山の民のサンカのハイブリッドと言えるのではないだろうか。

1・8 様々な山窩

最後に現実のサンカ及び棕の創作した山窩の中にいた、少し特殊な人々を紹介する。

サンカはセブリをして生活してきた人々が近親者同士で結婚して子どもを産むことだけではなく、外部、つまり一般社会から入ってきた者がサンカの群れの中に加わることで仲間を増やしていたようだ。外部からサンカに入ってきた人の中には、貧民窟出身で生活に困っていた人や、ハンセン病患者⁽⁴⁷⁾が、サンカの天幕があるところに同じようにテントを張りサンカ達と共に生活をしていいたい。さらにサンカの漂泊する生活に憧れて群れの中に身を投じた人もいたようである。⁽⁴⁸⁾ サンカは外部との関わりが少ないために閉鎖的な性質を帯びている一方で、生活に困っている者やサンカの生活に興味のある者達に対

して、門前払いをするどころか容易に自らの仲間として招き入れる懐の深い一面も持っているのである。

一方、棕の創作上の山窩にも特殊な境遇の人がいる。例えば、「盲目の春」のリスを飼う盲目の女性は目が見えないため仕事が出来ない代わりに、夜に山窩の男の相手をする事で一日の食料を得て生活している。また、「禿鷹」という作品には夫が群れの男に暴力を受けていても止めたり抵抗したりすることなく、ぼんやりとして感情を露わにしない白痴の女性が登場する。他にも四十雀を飼う少女や（「四十雀」）猿とともに生活する少女（「若い月」）、右手右足が利かない老人と彼を支えた老犬（「山の人々」）など動物を飼って一緒に生活している者もいる。

このように、棕の山窩小説作品でも、現実のサンカとほとんど同じように盲目や白痴といった障害、病気持ちの人と共に生活をし、様々な動物とも暮らしている。障害や病気持ちの人に対する山窩仲間の偏見、差別的な視線が作中で描かれてはいるが、それでもあらゆる境遇を持つ人を退けることはせず、共同生活を送っているところに山窩の仲間に対する思いやりが感じられる。

2 山窩の創作

本章では現実にはいたサンカと棕が創作した山窩の共通点及び相違点について見てきた。全体的に見ると、サンカと山窩とは互いに似通っている印象を受ける。つまり、棕の描いた山窩の姿や生活は現実のサンカに迫るほど現実味のあるものだったということになる。彼はどのようにして、リアリティのある山窩像を作り上げたのだろうか。

棕は山窩を題材とした小説を書くにあたって、祖父や父からサンカに関する話を聞かされたり、実際に山奥の部落を訪れサンカの伝説や物語などを聞いたりすることで山窩の知識を深めていたようだ。⁽⁴⁾ また前節でも触れたようにサンカの大胆かつ残忍な生活ぶりは警察からの情報を記者がまとめたり、それをもとにした論文が発表されたことで大衆に広まっていった。これは推測に過ぎないが、昭和初期辺りにメディアを通じて犯罪行為を

犯すサンカの様子が報じられていたこともあり、新聞や論文によってサンカの生態に触れる機会もあったのではないだろうか。根拠の一つとしては、前節でも挙げた早期のサンカ研究の一つである鷹野の『山窩の生活』が単行本として発売され話題になったのが大正十三年であり、棕が十九歳で法政大学に入学した時あたりのことであることが挙げられる。身内の者からしばしばサンカの話聞いてそのような人々に興味を持っていたとしたら、この本をはじめとした当時世間で話題になったサンカに関する論説に触れていた可能性は十分にあり得るのではないだろうか。

また、棕は山窩小説を書く際のこだわりを以下のように述べている。(50)

やはり、彼等の生活を、新しく、私の手で造りあげたいのであります。かうして、土臺石から自分の考へ一つで、彼等の生活をつくりあげて行く方が、よりよく彼等と共に、漂々たる生活の中にとけ込むやうな氣がするからであります。

棕は山窩の実態をありありと紹介するルポルタージュを書いたのではなく、実際の様子を踏まえつつ棕独自の山窩の姿を創り上げて、それを小説という形で表出したのである。さらに宮下も「棕の場合、山窩はやはり大自然を背景にしないとイメージが湧かないのであろう。そこには普通人を相入れない世界があるのだ。したがって、そこには現実の山窩とは異なった、棕独自の世界で創り上げた、架空の山窩が登場してくるのである。」(51)と指摘している。棕は一般人にとって非現実的で遠い存在であるサンカの姿を、実際のサンカを参考にしつつも自分の頭の中で想像して形にすることで、サンカをより身近なものにするとともに、彼の心の故郷である山の中を悠々と漂泊する理想の「山窩」を生み出したと考えられる。このように現実のサンカの話を知りたり調べたりする一方で、それを踏まえて新たな山窩の生活を創造したことによって、リアリティがありながらも独自の快活さ、たくましさがある山窩像が出来上がったのである。

棕の山窩小説が「一種の冒険活劇的な小説」(52)と評されるように、彼が生み出した「山

窩」は実際のサンカとは厳密に異なるものであり、生態を誇張して表現しているところもある。しかしそれが「冒険活劇」と言われるように、作品発表当時の仄暗い時流とは対照的な、大迫力かつ爽快感あふれる山窩の自然に囲まれた山々での豊かな生活を描いたために、彼の作品が多く有名な文筆家達の目に触れて話題となったのであろう。

第3章 山窩小説と動物児童文学

1 棕の初期動物児童文学

棕は山窩小説を発表したことで、子ども向け雑誌『少年倶楽部』の編集長須藤憲三に注目され、児童文学作家としての道を歩き始めることになる。須藤が棕の山窩小説に「ブンと放つ野性の新鮮なにおい」⁽⁵³⁾を感じたことから、児童向け小説に山窩小説で見られる野性味の溢れるテイストを織り込んだ「動物文学」が生まれたのである。このように山窩小説は、児童文学作家としての棕の行く末を切り開いたことから、動物ものの児童文学と切っても切り離せない関係にある。山窩小説がどのように、後の児童文学のテーマや構成などに影響を与えたのだろうか。また、山窩小説と動物ものの児童文学での人や動物の描き方にはどのように違いがあるのだろうか。

そこで、山窩小説『山窩調』および『鷺の唄』に収録されている作品と、棕鳩十初の動物文学作品である『山の太郎熊』や児童文学短編集『動物ども』の作品を比較して、それらの共通点や相違点を調べていくことで、山窩小説の影響を後の作品がどのような形で受けているのかを考えたい。

1・1 『山の太郎熊』

まずは、棕の児童文学処女作でもある『山の太郎熊』から見ていく。『山の太郎熊』は、少年向け雑誌『少年倶楽部』昭和十三年一〇月号に掲載されたものである。この作品は、療養のため山奥に住む鎌吉爺さん夫妻の元に預けられた「私」や夫妻の子堪太と、鎌吉爺さんの家で小さい頃から育てられてきた熊の太郎との交流を描いたものである。「私」たち

と友達のように仲良く暮らしていた太郎はやがて成長して子を産み育てるようになる。命がけで子ども達のために尽くす太郎を、「私」や鎌吉爺さん一家は感動しながら温かく見守っていく。この作品は、母性愛や人間と動物との交流を中心に書き表している。これは後に取り上げる『動物ども』の収録作品も同様である。しかしその一方で、人間の与り知らぬ動物の野性の姿も描き出している。

次の場面は、太郎が大切に育ててきた子熊を大鷲に連れ去られ、激昂した太郎と大鷲との激しい闘いの後の様子である。(54)

巢の側には、大人の体ほどもある大鷲が、首をねじ切られて紅にそまっていた。

太郎は、体中傷だらけで、特に腹は鷲の爪で引きさかれて、腸がはみ出していた。頭をぐったりと岩にもたせて、苦しげに息をついていた。

それでも、太郎は、死んだ子熊を離さずに、左腕でしっかりと抱いているのであった。

太郎は子を思う強い気持ちによって、凶暴な大鷲をやっつけて見事敵討ちを果たしたのである。この場面で象徴的に描かれているのは子を思う母親の、本能的な母性愛である。親の子どもに対する愛情、特に母性愛は、棕の動物文学の重要な要素の一つになっている。自らの身を犠牲にしても子を助ける親の愛情に、人間と動物との別はなく、全ての生物に共通するその愛情の美しさを、棕はさまざまな生き物の姿を通して表現しているのである。

そして、この出来事の後日談ともいえる場面にて。(55)

「太郎は、アルプス一の、えらぶつの熊じゃ。」

鎌吉爺さんも、おかね婆さんも、堪太も、夜になると囲炉裏をかこんでは、家内中で太郎の自慢をするのであった。

棕の児童向け動物文学に特徴的なのが、このような勇敢な動物に対する「えらぶつ」賛美である。「えらぶつ」賛美の表現は『山の太郎熊』のときから書かれている。この、人間が動物たちの行動によって尊敬を抱くようになるというパターンは『動物ども』にそのまま受け継がれている。

このことから、棕動物文学の基本的な題材、話型は処女作の時点である程度作り上げられていたことがわかる。しかし『山の太郎熊』では、太郎の子どもたちに嫉妬した「私」達が、餌の豆乳に唐辛子を混ぜるなど、人が動物に好意的でない気持ちを抱き、フェアでない対応をする点や、「私」と堪太が納屋の中で夜通し話し込む場面のように、人間と動物との交流だけでなく「私」と堪太たち人間同士の交流も見られる。これらの点から、主に人間と動物の対等な交流を描く『動物ども』の作品と『山の太郎熊』は描かれる人間と動物との関係が異なっている。棕は『山の太郎熊』を出発点として、試行錯誤し後のフェアな人間と動物の関係性を描く動物文学作品のパターンを作り上げていったのだろう。

1・2 『動物ども』より「月の輪熊」

次に、『動物ども』に収録されている作品の一つである「月の輪熊」を見ていこう。この作品の概要は以下の通りである。「私」が荒木という男と共に遠山川にイワナ釣りに行った際に見かけた子熊を生け捕りにしたいと考える。ある日、二人が子熊を生け捕りしようとするのを見た母熊が、子を助けるために決死の覚悟で「三十米もあるほど、高い大瀧」に飛び込み子熊を救助し、その母熊の姿に二人の男は感動を覚える、という話である。この作品の最も特徴的な場面は、やはり母熊が命がけで子熊を助けるところであろう。(56)

母熊は、瀧壺めがけて、飛び込んだのです。

だーだーだーあん。

大きな音と共に、物すごい水煙が立ちました。そして、熊の姿は、いったん瀧壺の中に、すっかり沈んでしまいましたが、また浮かび上がって来ました。それから、

泳ぐといふよりも、水勢に押し流されるやうにして、岸につきました。が、その岩に、頭をもたせたつきり、動かなくなつてしまひました。(中略)かはひさうに、死んでしまつたに、ちがひありません。

母熊が子熊を守ろうとした決死の行動が迫力のある描写によつて表されている。この作品もまた親による子への愛情の強さや、愛情のために身を挺して闘う動物たちの尊さを描いているといえよう。

母熊が滝壺に飛び込んだ後、「私」と荒木の二人は、母熊が生きていることが分かると、安堵と感動を覚える。(57)

「しめた。奴め、まだ生きてゐるので、ありまする。」

と、荒木は、その時、ほんとにうれしさに、いつたものです。

私は物をいへば、涙がぼろ／＼こぼれさうなので、

「うん、うん。」といつて、うなづいてみせるのみでした。

動物の母性愛が表れた行動に、人間たちは心を打たれる。動物の様子や行動を受けて感動を覚える人間たちの心境の変化もまた、棕文学ではよく見られるパターンである。それまで弱いもの、または獵の獲物として見ていた動物の、勇気や知恵、愛情に溢れた行動によつて、作中の人間たちは彼らに対して尊敬の念、いつくしみを抱くようになるのである。

このような人間たちの感情の変化は、さまざまな動物の仲間や家族を思いやる気持ち、またそこからくる生きることへのひたむきさ、生命力の強さに魅せられたために起こつたものである。これもまた、『山の太郎熊』でも見られた「えらぶつ」賛美のパターンであろう。

棕は懸命に生きる動物たちの姿をより印象づけるためにこのような描写を多くの作品で取り入れているのではないだろうか。

2 山窩小説と動物児童文学の違い

次に山窩小説での表現を見てみる。私家版『山窩調』、春秋社の『鷲の唄』ともに収録されている作品、「鷲の唄」を例に見てみよう。「鷲の唄」の話の筋は、『山の太郎熊』に類似しており、大鷲に子連れ去られ、夫を殺された虎の嬢が大鷲に復讐を果たそうとする。しかし、この後の展開は「山の太郎熊」とは異なる。彼女は勇敢にも大鷲に挑んだが、あつけなく大鷲に殺され、ついに復讐を果たすことはできなかったのである。

彼女の脳天には大人の拳がはいる程の大穴があいていて、息の根が止まっていた。

（中略）

鷲は大岩の上に、悠々と、とまっていた。彼のなめらかな翼には、朝陽が、黄金の王冠のように美しく輝いていた。

山の王者である吾々は、この野郎に、そうだ、この野郎に、散々な敗北をとったのだ。

〔「鷲の歌」 p26〕

この場面からは、自然や野性のもつ恐ろしさが感じられる。棕の山窩小説のほとんどでは、動物と人間は常に接した状態でありながら、人間が動物たちに対して感動したり、尊敬の念を抱くようなことはない。山窩の人々が動物に感動したなどという理由で殺すのを躊躇ってしまえば、逆に動物に殺されるか、自然の厳しさに負けて死んでしまう。山の中では人間と動物とが、お互い生活がかかった対等な立場であるために、弱肉強食の厳しい自然界の掟に則って毎日を送っており、その残酷性がこの一場面に表れているのではないだろうか。山窩小説は、児童向け動物文学のように動物たちの愛や勇氣に溢れた行動に生命の力強さを見出すのではなく、自然本来の姿のままであるが故に残酷な面を見せる野生動物を山窩の目を通して書き表しているのである。ここから、山窩小説を特徴づけるものは、壮大な自然やその中で生きる動物の実態を、時には生々しいまでに描いている点であ

ると考えられる。

また、もう一つ児童向け動物文学と異なる山窩小説の特徴として考えられるのは、第一章でも挙げたが、死が身近なものとして描かれている点である。同じく『山窩調』と『鷺の唄』に収録されている作品「朽木」では、動くことが出来なくなり、山の中で死の時を待つ老婆の姿を描いている。彼女がたった一人で迫りくる死の時を待つときの心情が実に静かに、しかし緊迫感を持って表されている。

訳の分からぬ恐怖が彼女をしめつけた。これはなんと云う物悲しい恐ろしさであろう。頼るものは何一つない人間の悲しさと恐ろしさだ。

〔「朽木」 p17〕

死への恐怖を巧みな文章で書いている。じわじわ迫りくる、冬の厳しい自然のもたらす死への恐れが彼女の心を徐々に蝕んでいく。その様を淡々と、かつ真に迫って描いている。しかし彼女を死に至らしめたのは、自然ではなく狼だった。

死にかけた彼女は始めてその声を聞いた。今までよりもっと大きな恐怖が彼女を黙らした。彼女はあきらめて死のうとしておりながら、彼女の考えていたより別の死が限りなく彼女を恐れさせた。(中略)

彼女から一尺と離れない闇の中で、獣は狼のなき声で、勝ちほこったように、高く、長く、冷たい運命のように吠えるのであった。

翌朝、彼女のかわりに、血痕が落ち葉の上に残って弱々しい秋の蠅が一匹、静かに彼女の唯一の物質的遺物である、その赤黒い血をなめていた。

〔「朽木」 p18〕

突然やってくる凶暴な動物、またそれによる死への、限らない恐ろしさが彼女の心情や情景描写からリアリティを持って表現されている。「朽木」ではあまり直接的に死の場面を描出していないが、他の山窩小説作品では、かなりグロテスクとも言えるような人間の死を書き表している。このように山窩小説、特に『山窩調』や『鷺の唄』に収録されている作品はそのほとんどで、人間の死が結末として描かれており、生の描写以上に死の描写が印象的である。『山の太郎熊』や『動物ども』などの児童向け動物文学では、主役―それが動物でも人間でも―死ぬことはほとんどなく、物語の結末も基本幸せに満ちたものである。しかし山窩小説では、死の描写が当たり前のように出てくる。これは、勇敢さや思いやりを含む、動物の本能的な愛情への賛美ではなく、山窩の人々の生活を現実味のある描写で書き出すことが山窩小説の主なテーマになっているためである。山窩の現実的な世界を描くために、野性的な生と死の表現を巧みに織り込んでおり、そうすることで、何にも縛られることのない自由な生き方をする山窩と、彼らの目を通して見る生き生きとした自然の姿を、読者の脳裏に鮮明に描き出すことが出来るのである。このように山窩小説は、山窩たちの姿から愛情、勇敢さなどを伝えようとするものではなく、自由奔放時には残酷な山窩の生活のありのままを描き出したものであり、その点が動物文学とは大きく異なる。ただ、表現や作中で描かれているものに違いはあれど、彼が描く山窩や動物の根底にある「懸命に生きる」という考えは山窩小説と動物文学に大きな差異はないのではないかと考えられる。

山窩小説と児童向け動物小説作品の特徴を見てきた。特徴から見ると、『山の太郎熊』は「本能的で純粹・素朴な母性愛―それに起因した勇氣・たくましさも含む―の賛歌」(58)であり、『動物ども』にも同様のことが言えると考ええる。動物文学は、母性愛や動物どうし、人間と動物との絆、自然や動物への敬意を込めて書いている。一方山窩小説は、母性愛を「吹き飛ばす、強烈な野性の賛歌」(59)である。山窩小説作品は何事にも縛られない自由な人間の生き方を表現しつつ、自然や動物の恐怖だけでなく内輪の人間関係の拗れや乱れ、山窩独自の習俗などによる残酷かつ過激な描写を含んでいる。そのため物語の傾向として

は動物文学と異なるものであると言える。このことから、『動物ども』をはじめとした棕の児童向け動物文学の基本的な作品の構造や、動物の愛を持った行動を起こす姿への賛美の姿勢は『山の太郎熊』を書いた時にはじめて作り上げられたものであったことが分かる。そして棕の児童向け動物文学は、温かみのある動物と人間との交流や、観察的な視線による動物の描出など、児童文学として子どもたちに楽しんでもらいつつ感動出来るような作品に練り上げられていったのである。その一方で、『山窩調』、『鷺の唄』などの山窩小説が後の動物文学の、豊かな自然風景の描写や現実感のある動物たちの様相の表現などに影響を与えていたことも確かであると言える。

また、『山の太郎熊』は『鷺の唄』の児童版と考えられ、子どもを捕らえた鷺に立ち向かった山窩の女を野生の熊である「太郎熊」に置き換えていると宮下は指摘している。⁽⁶⁰⁾人間を動物の親に置き換えたのは、詳しくは後述するが、山窩小説の発禁処分によって戦時中に人の自由さや命の大切さを説く作品を書くことが困難だったことが要因の一つとして考えられる。人間で野性味に溢れた自由な生活を表すと規制されてしまうことに思い悩んだ棕は、主役を人間から動物に置き換えて、当時の社会では描き辛かった「生命の尊さ」を書き切ったのである。

第4章 棕の生涯と作品に込めた思い

1 山窩小説と棕の心情

ここまで、棕の山窩小説の内容を中心に、その描写の正確さ及び虚構性や、後の児童文学への影響などについて見てきた。棕の作品形成には、生まれ育った故郷である長野県喬木村や、後に移住し彼の生涯のほとんどの時間を過ごすことになる鹿児島での生活、学生時代における彼の周囲の人々との交流及び読書体験などといった彼の生い立ちが強く影響している。この章では、彼の生涯が作品づくりにどのように影響を及ぼしたか、また様々な経験を通して書かれた彼の著作物にはどのような思いが込められていたのかについて探ってみたい。

棕は『山窩物の題材』というエッセイの中で、山窩小説を書くきっかけについて触れている。彼は、大学卒業後に鹿児島県の種子島や天草に移住する。生まれ故郷の長野の山の中とは違う自然に囲まれた島での生活に始めは充足感を得ていたが、しばらく経つと心の底に何か「淋しい物足らなさ」を感じるようになった。この原因不明の感情に悩まされた彼は、用事で出かける事になった屋久島の宿の二階から見た八重岳を見て、ふと懐かしさを感じたのである。(61)

私は数年ぶりで、山らしい山と向ひ合ひ、数年ぶりで、カスの全くない、からりとした心になれたのでした。(中略)

此の日以來、山を戀ふ思は、心の表面に恐しい力で湧いて出て來るのです。私が、物語の題材に山窩を選んだのも、まあ、かう云つた心の現れであります。

また、島での生活から四、五年後に教員として生活を送ることになる。病氣の母や妻、三人の子どもら家族を養うために仕事をしていたが、彼は教員生活に窮屈さを感じていたらしい。その仕事と実生活の中でのストレスが、彼を山窩小説に向かわせたのである。(62)

かう云う生活を送つてゐる私に取つて祖父や父から聞いた、山を流るる雲のやうに自由氣ままに歩き廻る山窩の生活は、虹のやうに感じられるのであります。自分の生活にやりきれない程の窮窟を感じる時、その窮窟さが生理的にまで影響して、頬が落ちくぼむ時國籍すらない彼等漂泊の民の生活を考へることは、私に取つては、オワシスであり、病人が、ソップを求めるやうなものであります。私の物語の題材に、山窩を選んだと云ふことは、まあ、云つてみれば生活の悲鳴をもらす穴口に、丁度之が適してゐるからであります。

棕は自分の思うような生活ができない苦しさを小説を書くことで紛らしていたのだらう。心の窮屈さを解放させる手段として、心も体も一般社会からの圧力や不安などの負の感情に縛られることのない自由な山窩を創出したのである。

また、『棕鳩十の本』第五巻に収録されている編集者の小宮山量平との対談記録である「自伝的対談」でも、棕は山窩作品を書いた当時のことを以下のように回想している。³

種子島やら加治木やら、明け暮れ海に面して暮らしているうちに、反って四季とどりの郷里の風景がよみがえるようになってね、その頃、しきりと山の作品が書きたくなるように気持が動いていたことは確かだね。

棕は幼少期に山に囲まれた場所で生まれ育ったこともあり、海への憧れが強かった。そのため海に面した鹿児島へ移住したものの、海に囲まれた生活をしてしばらく経つと、逆に四季によって違う顔を見せる豊かな自然に囲まれた山を恋しく思うようになった。この思いが前述した棕の実生活でのストレスと結びつき、雄大な山々を活発に渡り歩く山窩を主役とした小説の創作に至ったのである。

これらのことから、棕は故郷を離れてから突如湧き上がった郷愁や自然、特に彼の生まれ育った場所である山への憧憬によって、山を舞台にした山窩の物語を書いていたことが分かる。また教師という肩書きや戦争中という状況下で、日々の生活のために自由が制限された毎日を送る棕にとって、祖父や父から聞いた山窩の自由気ままな生活のありようが憧れの対象になっていたと考えられる。そして日々のストレスのはけ口として自由な暮らしを送る山窩を描くことで、鬱屈した思いを発散しようとしたのである。これらが、棕が山窩小説を書くようになった大きな要因であろう。

2 作品形成の背景・意図

次に、棕が山窩小説を書いた際の背景やそれらの作品を書いた意図、またその後児童向け動物文学を書き始めるようになった経緯について考察する。

山窩小説と動物文学とは前章で挙げた作品づくりにおける共通点の他にも密接な関係がある。『動物ども』をはじめとした棕の動物文学初期作品は、第二次世界大戦に突入、またはその真っ只中に書かれたものである。彼が動物文学を書き始めたのは、児童向け雑誌『少年倶楽部』の当時の編集長、須藤憲三からの熱い要望のためであった。棕はその要望を最初から受け入れたわけではなく、児童文学についてよく知らず、何を書けば良いかわからないために、児童文学を書くことに対して、長い間思い悩んでいた。その時、須藤の手紙に書き添えられていた「あなたの山の民の物語には、野性の動物がよく出てくるが、ああいう素朴さと野性味を、児童文学に生かせないものだろうか」⁽⁶⁴⁾という助言によって、棕は児童向け動物文学の道へ進んでいくことになったのである。また、動物文学以前に書いていた山窩小説が発禁処分になってしまいうなど、当時の厳しい言論統制の影響を直に受けたことも棕を動物文学に向かわせた要因の一つである。棕は思想統一の雰囲気息苦しさを感じていた。それに対する「感情的反抗の物語として」⁽⁶⁵⁾書いた山窩小説も徐々に厳しくなる言論統制のために伏せ字だらけにされてしまったり、発売禁止にされてしまったりした。思うことが書けなくなり筆を断とうと考えていた時に、先の須藤憲三からの動物文学への誘いがあったのである。人間の自由奔放な生活や瑞々しい生命力を直接書く当時の統制に引っかけたまま。しかし「動物のありのままの姿を描いていれば、統制にはひっかかりにくいだろう」⁽⁶⁶⁾と考え動物文学を書き始めるようになったのである。また棕は戦争のために召集され、戦地で無惨に散っていく青年たちの姿に心を痛ませ、死ぬことが誇りであるとした当時の社会のあり方に違和感を覚えていた。そのため「動物の生態を描きながら、愛情をいのちの問題を、扱ってみよう。この不安な時代に生き、戦地に送られる若者の背後には、愛情の火が、命へのいつくしみが、燃えながら、幾重にも幾重にもとりまいていてということを、閉じ込めた物語と、若い人たちと、その母たちに、ささげよう」⁽⁶⁷⁾という思いから、動物文学を「死に向かってかりたてられていく若い人々

のためにささげる「いのちの歌」のつもりで書いた」(68)のである。彼は死を賛美する時代に生きることの大切さを伝える作品を、自然の中で生きる人の姿、そして動物の姿を通して書こうとしたのである。このように山窩小説と児童向け動物文学作品は互いに連なっており、共通した意図を持って書かれたものであったと見て良いだろう。

動物文学の元になった山窩小説は一時発禁処分になってしまったが、前述した彼の思いがしっかりと込められている。出版された当時に彼の作品を読んだという小宮山量平は以下のように彼の作品の魅力を語っている。(69)

時代閉塞の壁に対して、棕鳩十の『山窩調』は、思いがけない方向から挑戦を試みた。正に、一語一語が詩のことばであった。一行一行がびちびちと鮮烈なひびきを奏でていた。(中略)時代創造の手がかりを、棕鳩十からは、いきなり感性的にささやかれるような思いであった。『たしかに、時代は重苦しい。若ものの進むべき前途はとざされている。けれども若ものたちよ、先ずはわが山の仲間たちとともに、山ふところへ、森の奥へ、太陽のふりそぐ天地へ、自分を解き放つがいい。そこには不屈の血のたぎりがある。生の歓喜がある。失われることなき自由がある!』そんなふうに、棕鳩十の作品は、いきなり語りかけるのだ。

棕は鬱屈した社会を跳ね除ける力強い生命力や過酷な状況下に置かれた人々に希望を与えるような自由さ、それらを山窩小説で表現していた。また小宮山は棕について以下のよう

に評価している。(70)

棕鳩十の如く自然の世界にひそむ動物どもを凝視する作家なればこそ、生きとし生けるものの真の勇氣といのちへの慈しみを、深く温かく描きぬくことができた。棕鳩十こそは戦中にも、生命への軽視に筆を染めることなく、ひたすらに生命への愛を描きつづけ得た稀有の作家であった。

棕は山窩小説以前の詩作の経験から得た豊かな詩的表現による新鮮な山窩及び自然の描写を含みながら、生命の尊さを謳いあげる優しさや温かさを感じさせる文章を書いた。それは逼迫した事態の中で民衆に圧力をかける社会への反発心と自然、動物、人間といった全ての生命に対して慈しみを持っていたからこそ書き得たものであったのだろう。

このように、棕の山窩小説は読者にとって興奮や感動を覚えるようなものでありながら、圧迫されて自由を失い、生命を軽んじる社会の中に生きていた人達に自由であることの喜び、生命の美しさを伝えるために捧げられた物語なのである。彼の山窩小説は、「無垢なる野生への礼賛と憧憬」⁽⁷⁾を感じさせるほど、自然の中を悠々と生きる山窩の躍動かつ魅力的な姿を描いたものである。その一方で、苦しみの中を生きている人々に向けて自由な生き方や生命の大切さを示し、明日を生きる希望を与えるような作品であるともいえる。

おわりに

第一章から第四章にかけて棕鳩十の山窩小説作品の特徴や正確性、後の作品執筆への影響や作品に込められた意図などを見てきた。棕はサンカという民族に強い関心を抱き、彼らについての周到な調査を行いつつ、自らの理想の山窩を作品内で作り上げていった。また彼は故郷、さらに大きくいうと自然への強い畏敬の念や人間の生命に対する並々ならぬ慈愛の心を持っていた。だからこそ、山窩の奇妙で現実離れた姿を描きつつも、彼らを異質なものとして軽んじることなく同種の人間として捉えていたために独特の「リアルさ」を感じさせるような作品が生まれたのであろう。

本論では山窩小説とは何か、また棕の山窩小説はどれくらい現実には迫っているのか、どうして山窩を描こうとしたのかを調べ、それを僅かながら明らかにすることが出来たのではないかと思う。ただ、本論で取り上げた山窩小説以外にも山窩を題材にした棕の作品はあるし、サンカに関する研究も盛んに行われている。それら全てを本論では調べることは出来なかった。棕の山窩小説をより深く理解するために研究する余地はまだ沢山残されて

いる。彼の他の山窩に関する作品や彼の作品と同時期に書かれていた他の作者による山窩を題材とした小説、論文を調査・比較することがさらなる棕の作品及び山窩小説の理解に繋がるのではないかと考える。

またあまり棕の作品に触れたことのない人にとって、山窩小説は彼のイメージを変えるものであると思う。筆者自身棕の山窩小説作品を読んでいく中で、彼と彼の作品に対する印象が大きく変わった。山窩小説の中では動物児童文学と違って優しいだけではない、人間や自然の残酷な一面も見せている。しかしそれを濁さずありのまま書くことによって、読者に人間が本来持つ強さ、自由さを思い出させる。彼の作品からは生き生きとした生命力が感じられるとともに、厳しい環境を生きる上での強かな精神の在り方が示されていると考える。そのため、文明の発展によって豊かでありながら苦しみや辛さを抱える今の社会に生きる人にこそ、棕鳩十の作品に触れて彼の小説の持つ魅力を再発見してもらいたいと切に思う。

※本論で引用している「山のトンビ」、「山の鮫」、「女豹」、「秋」、「春の日」、「夕立」、「鉄砲みず」、「山犬」、「霜の花」、「火」、「猛禽類」、「敵」、「打たれた鷺」、「黄金の秋」、「膝の上」、「炎飆(なつあらし)」、「朽木」、「盲目の春」、「鷺の唄」本文のテキストは、『棕鳩十の本 第二巻 鷺の唄』(理論社 一九八二年六月)に、「老山窩と娘」、「山の私窠子」、「山の人びと」、「山の娘」、「掟の下の子」本文のテキストは『棕鳩十の本 第三巻 山の恋』(理論社 一九八二年六月)に拠った。

参考・引用文献

- (1) 宮下和男「独自の山窩を描く」(『信濃教育 1296号』信濃教育会 1994年1月) p70
- (2) (1)に同じ p71
- (3) (1)に同じ p71
- (4) 「平成16年度版少子化社会白書 5 平均初婚年齢の推移:子ども・子育て本部」内 閣 府
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2004/html_h/html/g3350000.html (参照年月日:2019年12月1日)
- (5) (1)に同じ p70
- (6) (1)に同じ p69
- (7) 棕鳩十『棕鳩十の本 第一巻 夕の花園』(理論社 1982年9月)
- (8) (7)に同じ
- (9) 大原洋子「棕鳩十」(「日本の児童文学作家(3)」『講座日本児童文学(8)』明治書院 1973年10月) p162

- (10) 鳥越信「棕鳩十とその作品について」他(『児童文学史研究』風涛社 1971年1月) p 405
- (11) 棕鳩十「山窩物の題材」(『書物展望6』10巻64号 書物展望社 1936年10月) p 288
- (12) 筒井功『サンカ社会の深層をさぐる』(現代書館 2006年10月)
- (13) 沖浦和光『幻の漂泊民・サンカ』(文藝春秋 2001年11月) p 258・259
- (14) (13)に同じ p 260
- (15) 柳田國男「イタカ」及び「サンカ」(谷川健一、大和岩雄編『民衆史の遺産 第一巻 山の漂泊民―サンカ・マタギ・木地屋』大和書房 2012年4月) p 223
- (16) (12)に同じ p 17
- (17) (13)に同じ p 251・252
- (18) (13)に同じ p 280・281
- (19) (12)に同じ p 124
- (20) (12)に同じ p 140
- (21) 筒井功『漂泊の民サンカを追って』(現代書館 2005年7月) p 79
- (22) (12)に同じ p 132
- (23) (12)に同じ p 133
- (24) 鷹野弥三郎『山窩の生活』(明石書店 1993年10月) p 131・133
- (25) (15)に同じ p 222
- (26) (21)に同じ p 47
- (27) (13)に同じ p 280
- (28) (13)に同じ p 280・281
- (29) (21)に同じ p 47

(30) (1)に同じ p 68・69

(31) (12)に同じ p 94

(32) (12)に同じ p 94

(33) (21)に同じ

(34) (24)に同じ p 50

(35) (13)に同じ p 280・281

(36) (21)に同じ

(37) (24)に同じ p 109

(38) (15)に同じ p 223

(39) 塩見鮮一郎「(解説)虚構としての山窩―『山窩の生活』をめぐって―」(鷹野

弥三郎『山窩の生活』 明石書店 1993年10月) p 169・170

(40) (38)に同じ p 170 『山窩の生活』及び「(解説)虚構としての山窩―『山

窩の生活』をめぐって―」ではサンカを「山窩」と表記している。

(41) (38)に同じ p 174

(42) (38)に同じ p 181

(43) (13)に同じ p 279

(44) (13)に同じ p 272

(45) (13)に同じ p 273

(46) 礫川全次『サンカ学叢書第1巻 サンカ学入門』(批評社 2003年10月)

p 47 この文献では山の盗賊集団を「山窩」、一般的な漂泊民を「サンカ」としている。

(47) (12)に同じ p 156・159

(48) (21)に同じ p 50・51

(49) (11)に同じ p 288

(50) (11)に同じ p 288

- (51) (1)に同じ p 71
- (52) (1)に同じ p 68
- (53) (9)に同じ p 164
- (54) 棕鳩十『棕鳩十の本 第十卷 山の太郎熊』(理論社 1982年12月) p 27
- (55) (53)に同じ p 28
- (56) 棕鳩十『名著復刻日本児童文学館 第2集31 動物ども』(ぼるぷ出版 1974年10月) p 93-94
- (57) (55)に同じ p 94-95
- (58) 阿部真人「棕鳩十文学の研究―動物児童文学の原点を探る―」(『国語教育研究』(26)上 広島大学教育学部国語教育学会 1980年11月) p 333
- (59) (57)に同じ p 333
- (60) (1)に同じ p 71
- (61) (11)に同じ p 287
- (62) (11)に同じ p 288
- (63) 「自伝的対談(1)」(棕鳩十『棕鳩十の本 第五卷 野性の谷間 獵師物語 後編』理論社 1982年7月) p 229
- (64) 棕鳩十「私と動物文学」(『日本児童文学』15(2)(147) 日本児童文学者協会 1969年2月) p 47
- (65) (63)に同じ p 46
- (66) 棕鳩十「自作を語る」(『子どもの本棚 27 棕鳩十その人と作品』日本子どもの本研究会 1979年7月) p 45
- (67) 棕鳩十「処女作の思い出」(『日本児童文学』29(5)(341) 日本児童文学者協会 1973年8月) p 119
- (68) (63)に同じ p 48
- (69) 小宮山量平「日本青春文学の源流―棕鳩十の不屈なかがやき」(『信濃教育

1296号』信濃教育会 1994年11月) p53

(70) 小宮山量平「棕鳩十文学の骨格―その楽天主義によせて―」(『紀要』棕鳩十・人と文学 1』棕鳩十文学記念館 1996年3月) p29

(71) 佐伯修「『山窩小説』とその時代」(『サンカ 幻の漂泊民を探して』 河出書房新社 2005年6月) p23

② 32字×25行＝800字

② 800×70＝56000字